

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第六十七卷 第五号



Sige

5

日本幼稚園協会

子どもの生活をいっそう楽しくする歌の本



新しいマーチ

保田正編著 A 4 94頁
.....400円 円90円

ぞうさん

まどみちお 子どもの歌100曲集
B 5 206頁.....500円 円90円

ごはんをもぐもぐ

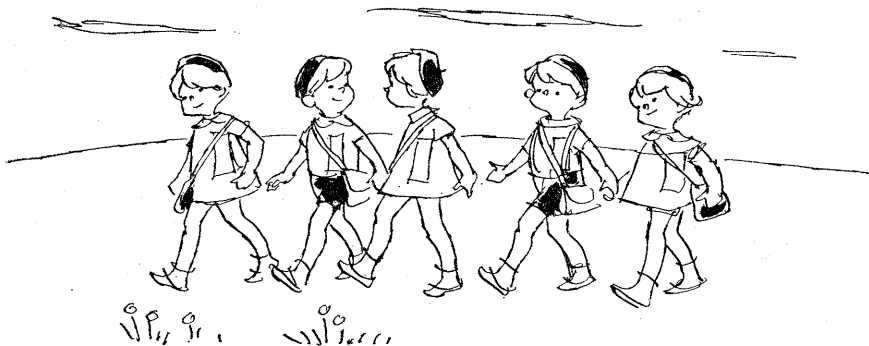
まどみちお作詞・磯部 俣作曲
B 5・92頁300円 円70円

おもちゃのラッパ

湯山 昭・子どもの歌曲集
B 5・202頁.....600円 円90円

わらいかわせみにはなすなよ

サトウハチロー・中田喜直・子どもの歌曲集
B 5・106頁.....450円 円70円



幼児の教育 目次

——第六十七卷 五月号——

表紙 小坂しげる

現代の母親と教師②	森田宗一 (2)
「育ての心」の再発見	津守真 (8)
保育の過程(一)	石森延男 (16)
幼児にお話するときの心がまえ	飯田泰造 (20)
幼稚園の教師に望むもの	
教師の創造性と幼児の創造性(二)	
一学期の抱負と展開	柴田いつ (26)
子どもにみんなで遊ぶ楽しさを	関惠美子 (34)
「基本的な生活態度の形成をめざす指導」の研究(九)	稲岡百合・谷川馨 (44)
愛珠・思い出するままに(三)	中村道子 (52)
五歳児の記録⑩—二学期	磯部景子 (60)
五歳児の記録より	堀合文子 (66)
運動会についての問題点	

現代の母親と教師

< 2 >

「育ての心」の再発見



森 田 宗 一

一、雑草ともやし

教育といい、しつけといい、いつの世においてもその根本は育つもののいのちを尊重し、その心を知り、育てるものが己が心を正すこと、その両者のいのちのちの出会いとところになければならない。それは、大河の流れのように、尽きず濁れず、流れ絶えざるものである。その大きな流れの中から、おのずから時代により国により、また家庭や教育の場に応じて、具体的に必要な方法が生まれてくるのである。

ところが、この当り前な根本のことが忘れられ、育児教育があまりに目先の技術にはしり、親や教師がテクニシャンになってしまっている。そのために、いかにつくられた問題児が輩出していることか。さまざまな臨床の事例は、そのことを実証している。

私はかねがねさまざまな臨床の場に登場する心身の症状や行動上の問題ある児童青少年をわかりやすく大別して、もやし型と雑草型と名づけている。そしてその両者に基本的に共通する性格特徴は、「気はやさしくて力なし」だといふのである。もやし型とは、過保護で甘やかされかばわれ過ぎて、我慢するとか人の身になつて考えとかの訓練のないまま幼少時を過ごしたものの。雑草型とは、必要な親の愛情や保護もうけることなく、生みっぱなしのような状態の中で野放しに育つて、情緒の荒れたまま放置されたようなタイプである。

A君はそのままやし型の典型のような少年である。経済的には裕福な家庭で大事にされて育つた。幼い時から何不自由なく、欲しいものは何でも満たされ、かなりわがままに育つた。小学校時代、学校の成績は普通だが体育がだめで走ることは遅く、バネ力

がなく、体は大きくむしろ肥満しているのに、腕や脚の力が弱い。家庭教師も入れ替わりつけていたようだが、必ずしも成績は上がらない。我慢して物事をやる習慣がなく、身勝手なことがそのまま家庭で通り、むしろ親が何事によらずかばってしまふ。

「それころぶそれ危なし」という親の過ぎたる護り子らを「そんなう」というしつけのいろは歌の通りである。私立中学二年の夏頃から生活が乱れ、友だちと遊び歩き、学校は怠ける、家財の持ち出し、徹夜マージャン、かけごとなどと進行していった。幼いときから子ども第一主義に甘やかして育てた習慣から、両親とも強く叱ることをせず、たまに父親が思いあまって注意などすると、カッと頭へきて当たりちらす仕末。母親はただおろおろするばかりである。専門的な性格検査によれば、衝動の抑制力が弱く、自己中心的で、みせかけが多く、気分が変わりやすい。意志力や忍耐力がなく、根気とか持久力がない。典型的な非行少年の性格である。それはまた生活史を通じてみると、この頃の物に恵まれた家庭に非常によくある幼少時以来の性格形成の結果でもある。

A君の母親は、審判廷で苦渋に満ちた表情で言った。「うちの子は子どものときから、何不自由なくさせ、欲しいものは何でも与えておりましたのに、どうしてこんなことをするようになったんでございましょうか」何不自由なく欲しいものは何でも与えていたという。「おあづけ」の味というものが全くない。彼の非行性

の原因は、まさにそこにあつたといつてよい。残念ながらこの頃の親には、そんなことさえわからなくなるまで、育ての心が忘れられてしまったのである。それはこのA少年の親ばかりではない。かなり一般的なムードではなからうか。

B子は裏長屋といつてよいような、二世帯同居の家庭に生まれ育つた、いわば雑草のような少女である。野性的なたくまじさと素朴さはあるようなものの、女の子らしい情緒は貧困で、立ち居振る舞いも荒っぽく、感情もすさんでいる。父親は大酒飲みで癖が悪く、乱暴をし子どもたちをもやたら殴る。父親が金をうちに入れないからという理由で、母親も下町の鉄工場に働きに出かけて留守がち。B子と弟の三郎は、幼いときからブラブラ遊びまわるのが癖であつた。両親のいさかいか、同居のよその家族とときどきまきおこる立ちまわりのケンカに耐えられず、小学校時代にも何度か家出したことがある。中学へはほとんど最初から行かず、この頃は家出のときが多く、帰宅することが少ない。不良仲間に入り、早くから性関係をもち、いよいよ気持もすさんできた。今度の事件も、そうした仲間と一緒にやったことで警察の調べをうけることになつたのである。

普通の家庭、つまり子どもの教育のことを大事に考える親のもとでは、B子のような場合はあまり多くないことであろう。しかしどんな地域の小学校にもそれに似たような子どもが何人かはい

るもので、学校教育のわくからはみ出し、人にとまれ、やがて脱落していくことが多い。

しかし今日何よりも注意すべきはA少年のようなタイプである。子ども本位に考え、豊かに物をととのえ、親は一生懸命子どものことを考え苦勞したつもりで、実は丹精こめて愛する子どもを性格の弱い、非行にも脆い人間に仕立てているようなものである。

二 子どもは生命である

子どもというものは、輝かしい、たくましい生命をもって生まれ、それぞれのの持味を發揮して伸びようとしてやまぬものである。家庭において生命ははぐくまれ、そこを温床として育つ。それには保育する者（とりわけ母親）の並々なぬ丹精が必要である。そして自ら生きる力を持ち、いろいろのことに抵抗感もちながら、それに耐え、それをのりこえて成長する。すばらしい成長力とエネルギーと適應能力をもっている。

その自然にそなわつたいのちの力を信じ、尊重しなければならぬ。その生命の前に敬虔な心をもつ者だけが、人の子を育てる者としての資格があるのだといえよう。大きな自然からそなわつた子どもの心を知らず、それを無視する親がいかに多いことであろう。子どもについていつもイライラ、ハラハラして、あれやこ

れや手をかけている親が、多くの場合、子どもの生命力の尊重を忘れ、わざと子どもを弱くし育て方を誤っている。育児の根本は、その自然の生命力と適應の力をおおらかに信じ、無理をしないことである。いろいろ困った子どもの問題をかかえた親に接し、また大変すこやかに子どもも育てあげた親を見ると、おのずからこの理を体得しているかないかよるといえるのである。

小児科医の權威、遠城寺宗徳博士がよく言われることであるが、幼子のもつ生きる力を信じ、おおらかな謙遜な気持で子どもに接するのが、強い子を育てる秘訣なのである。たとえば母乳で育つた子は、見かけは大きくなくても、いきいきとして免疫その他の抵抗力がつよく、暑さ寒さなどへの適應力が、人工栄養の子どもより強い。それなのに母乳栄養の子が年々減っているのは、「幼子の心の中にもっている力を信じない母親、その他周囲のものの心がけによる」のである。そしてこんなことも言っておられる。

「だいたい母乳は、生まれたときには子どもが吸いついて吸えば与えられるという準備状態にあるもので、吸わなければ出ないのです。子どもが根気よく吸いついていく間に、二十日、一ヵ月たちますと、はじめてたくさん出るようになるわけです。したがって一週間以内に乳が足りないというのは当り前のことです。それをちょっと出がわるいからといっては、「だめだ、こんなことではやせてしまう」とおばあさんの声援なども加わっ

て、大きいそぎでミルクを買ってきて飲ませる。そうしますと、子どもは出にくいお母さんの乳を根気よく吸うよりも、楽な穴の大きいミルクのほうに吸いついてしまつて、出るべき母乳はますます出なくなつていく。それが母乳栄養減少の大きな原因だと思つたのです。よく「親の心子知らず」と申しますが、「子の心親知らず」がたくさんあるのでして、子をして言わしむるならば、おそらく「お母さんたち、あわてなざるな、もう少し私に吸わせてくれ、吸い出してみせる」と言うでありますよ。

こうした子どもの内にある母の乳房を吸つて生存しよう、成長しようという、生きる力を私たちは信じ、また育てていくことが必要ではないかと思つたのです」

子どもはみずみずしく生きているものであるが、必ず保育する者の愛情ふかいまなざしや世話や愛撫に反応してすくすく伸びるものである。生き生きしたいのちは、それにふさわしい育てるものの心との接触を望んでいる。幼児をあやしている母と幼児の姿を見ると、そのことがよくわかる。母親は一心に子どもを見つめ「イナイイナイバー」とあやす。その目の輝き、明るい口調や語感、何よりもそのときのお母さんのはればれした幸福感に満ちた気持ちに反応して、子どもは、ニコニコと笑い、ときには笑いこけ、すばらしい表情を示す。そうしたことのくりかえしによつて、子どもの情緒は豊かに育ち、表情やしぐさも生き生きとす

る。それと反対に、母親のそういう愛撫をうけず「イナイイナイバー」はあつても、心のない言葉だけだったら、子どもの情緒のリズムは反応せず、笑いもしないであらう。育つ者の心とその要求が満たされず、やがて心身感情ともども育つうえに障害をもたらすことになる。結婚してやがて子どもの生まれた若い母親が赤ちゃんを抱いて訪ねて来るときの、母子の「イナイイナイバー」のようすで、その子の何年か先を予測することさえできるのである。

子どもの発達と育てる心

人間（子ども）は、肉体と精神との結合による複雑な生きものである。肉体に成長があり、幼少時の成長はまことに驚くべきものであるが、その心の成長発展もまた驚くべきものである。その肉体と心とはバラバラなものでなく、微妙に結合し、相関的であり一如であるといつてよい。育児とか教育は、その適切な相関的成長をはかることである。

児童心理学の大家アノールド・ゲゼル博士は言っている。

「子どもは長い人類の歴史を、圧縮されたかたちでひととおり通らねばならない。これは時間のかかる仕事である。彼の生理の機構は、その全力を使いこなして、祖先からずっと伝えられて来た人類の縦糸を、自分で織りなしていかななくてはならな

い。彼の複雑微妙にからだ神経組織全体を使って、ながい人類の歴史を、人間にふさわしく受けつがなくてはならない」

人類の歴史をかりに十五万年とすれば、子どもは十五歳ぐらいになるまでに、ちょうど一万年を一年の間に経験しながら成長するわけである。本当に驚くべきほど複雑な豊富な経験をするのである。この論理を胎児の発達にあてはめると、母の胎内に赤ちゃんが宿ってから生まれるまでの十ヶ月は、まさに微生物が人類に変化（進化）し、成長した十億年に近い年月と同様の変化と成長だと言えよう。それは絶えず、進化し成長してやまない力を内に秘めた長るべき生命の展開である。

誕生してから一年ぐらまでは、また胎児期と独立児との両者の重なりの方である。つまり生まれて数ヶ月は、まだ独立の個体としての資格がないほど母親依存で、胎内の延長のようなところがある。スイスの学者ポルトマンの説によると、人間は普通の動物とちがつてすぐおとなになるにはながい年月がかかるが、生後一年は生理的にいえば実は胎内にいるはずの状態である。つまり人間は一年早く生まれたわけだという。いわゆる「人類早産説」である。何のために早産するかというと、人間らしい情緒やしぐさ―人間性を学習するためだというのである。なかなかおもしろい考え方である。たしかに人間は生まれてから何よりも母親のひぎもとで保護され愛撫されつつ、人間的な文化条件の中で人

間になる学習をするものである。そのことを新生児は激しく求める。そのことを知ること、そして人間によって人間らしく育てられてはじめて人間になるのだといえよう。一歳時を過ぎるまでの乳幼時の保育がいかに大切であるか、このことによってもわかるのである。

次の大きな成長の峠は、三歳時である。「三つ子の魂百まで」という諺のように、人間の基本的なものは、おおよそこの頃に培われる。したがってこの頃にその心身の諸機能を思いきり伸ばすことが必要である。親のひぎもとだけでなく、子どもの活動範囲は広くなり、いろいろな生活経験の中で、終生にわたって大切なことをたくさん学びとるのである。すべったりころんだりヤンチャ遊びをしながら運動機能が発達し、身ごなしをおぼえ、創造性や抑止力が著しく育つ。感情も新春の若芽のように萌え出し、自分をつつむ外界に対してはげしくゆれ動き、飛躍間に成長する。

第三の峠は、六歳時である。子どもの行動圏はいよいよ広く、家の外遊びに夢中になり、友だち仲間との集団生活を求める。目的なき冒険心、自己抑制心、そして次第に自己中心から脱却するようになる。この頃の伸びゆく力育つ力は外界としての物や人や条件でなく、人間関係に重要性がおかれる。したがってこの頃の親子兄弟の関係、遊び仲間や先生との関係などは、その後の人格形成とか行動の傾向に重大な影響をもっている。グリユック博士

夫妻は、多年の研究の結果、六歳時の家庭内の人間関係（父による訓育、母による監護、父母の愛情、家族の結合など）や周囲との関係などから、将来非行に陥る者とそうでない者とを選びつけることができるべきと言っている。たしかにわれわれの臨牀の経験からも、問題の少年とそうでない者とのわかれ道の一つが六歳の頃にあるといえそうである。

この峠をこえて第二の誕生期と呼ばれる思春期に至る時代はまさに家庭と学校と両方にまたがって成長し、教育される。親だけでなく先生、むしろ親よりも先生、そして友だちが大切なときである。その友だちもやがて「彼、彼女」と関心が特定の異性に向かう。育つ者の心は、他なる者との深いつながりを求めるのである。教育に当たる者は、まずその内的要求を正しく知り、人との出会いの転機というものを適確に見て、その者と出会う己が何であるか、どうあるべきかを謙虚に自己省察すべきものである。教育とは、そういう出会いの中に営まれる意識的あるいは無意識的な人間育成の営みにほかならない。

四　むすびに

「育ての心」ということをつねに説かれ、それこそ保育・教育の根本だとされたのは、外ならぬ故倉橋惣三先生である。日本の保育学は、その先生のがやされた土壌の上に展開されたのであ

る。その後の保育の学を一言にして言えば、科学化と技術化ということであろう。しかしその科学と技術が果たしてまことの人間育成の学、正しく創造的な人間の学となつていであろうか。ことに保育と教育の実際がこれでいいのであるか。客観的な条件や社会環境の問題ももちろんあるが、何よりも保育する者が育つ者の心を深く知らず、育てる者の心を失っているようである。その結果は、科学の名の下に驚くべき非科学的育児が横行し、問題児はむしろそこから作られている向きが少なくないときえ言えるのである。もちろん倉橋先生の三十年前説かれたことがすべてそのまま現在適用されるというわけではない。どんなすぐれた人にも言えるように、先生もまた時代の子であり、歴史的条件を背景としておられたであろう。批判されてしかるべきところも少なくないであろう。しかしその根底とされた「育ての心」は今日もまた大切であり、今日のような時代にこそ、忘れてならない精神なのである。

さまざまな臨牀の明暗の事例を通じ、「育ての心」の再発見こそ、今日の視野せまい、迷路に入ったかと思われる世の保育の理論と実際に、新鮮な力を供給し、活路を示すものと言つて過言でないと思う。そのことは、われわれの周辺にもよい例が少なくないことを、とくにここに記して稿を結ぶこととしよう。

（東京家裁判事・お茶の水女子大学）

保育の過程(一)

津 守 真



教育の実際にはいる以前になされる計画や論理的分析は、教師と幼児との毎日の接触に役立つときには意味がある。しかし、それを妨げる作用をなすことも多い。

教育の本番は、教師と幼児とが実際にふれて活動する場である。これが保育の過程である。この過程において、保育者(教師)と幼児とがどのように力動的に関係しあい、その中でどのように幼児の発達が行なわれていくかを明らかにしてみたい。「計画」の研究よりも、本番の「保育の過程」をどのようにするかを研究することの方がはるかに重要であろう。以下、ここでは、教育を幅広く理解するために、保育ということばを用い、教師よりも広い範囲を指す保育者ということばを用いていくことにする。

序論

保育の過程を通して実現されるものは何であろうか。このことを最初に考えておく必要がある。保育の過程は、その中で幼児が発達し、人間が作られてゆく過程であり、方向をもったものだからである。

保育の過程を通して、幼児の中に実現されることとして、次の諸点は、重要なことである。

第一に、幼児のもっている能力を十分に発揮できるように生活を実現することである。その内容は、発達の段階により、個人によって相異なるのであるが、それぞれの子どもなりに、十分に力を発揮して生活することが、発達の上で重要である。

第二には、幼児がよるこびと満足とをもって生活することである。これは、幼児が十分に能力を発揮できるときに必然的に伴うものである。幼児が自分の能力に合ったことならなく、んで成就感をもつとき、そのことから生ずる内的な満足があ

る。幼児の一日の生活の中には、どこかに、このような内的なよろこびと満足がなければならぬ。

第三に、幼児は保育の過程の中で、いままで知らなかった新しい世界にふれ、あるいは、新しいことができるようになって、自分自身が変化することを経験する。おとなが用意した活動の系列を通り抜けるだけではなくて、幼児は新たな自己を発見していくのである。そこに、次の段階への発達がある。一日の保育が終わったときに、幼児は、自分が変化した経験をいくつも積んで、自信とゆとりを感じ、次の生活への新たな意欲を起すようなものでなければならぬ。

第四に、幼児の生活は自分で選択し、自分で決意し、自覚をもって困難をのりこえていくものでなければならぬ。幼児は、ある望ましい行動を自動的にするように訓練されるのが重要なのではない。そこで自分がなっとくして、よいものを選びとり、行動していくことがたいせつなのである。誇りをもってやりとげる、たのしみに胸をふくらませてとりかかると、幼児なりに勇気をふるい起こしてやる、などという経験をすることにより、人間らしさが養われていくのである。

以上述べたことを要約するならば、保育の過程において、幼児が人間として成長していくように生活を実現することが、幼

児の現在にとっても、また将来にとっても必要なことといえよう。

保育の過程において、幼児について述べたことは、保育者にとっても同様にあてはまる。

第一に、保育の過程において、保育者は自分のもっている能力を発揮できるものでなければならぬ。与えられたことを遂行するのではなくて、保育者が自分の全力をそこに注ぎこむことのできるもの、すなわち、保育者自らの創造力を働かすことのできるものでなければならぬ。

第二に、保育者は、保育することによるこびと満足を感じることのできるものでなければならぬ。自分の力をつくしたことに對するよろこびと、子どもと共に生活をつくり上げたことに對する満足感とである。

第三に、保育者も、保育することによって、日々新しい経験をし、自分自身が変化することを経験するものでなければならぬ。保育者はある既定のものを与えて、子どもだけが新しく学習するというのではなく、保育者も自己が新たにされていくのを経験するのが保育の過程である。

第四に、保育者も、その場にあたって、判断し、選択し、決

意をもって行動するものである。既定の方針に従って行動するだけでは保育にはならない。保育場面には、そのときにはたらく多くの要因があるのであって、それを考慮にいられて、そこで行動をきめていくのである。すなわち、保育の過程は、保育者自身も人間として成長していくようなものでなければならぬ。

ここに、幼児と保育者について述べたが、この幼児と保育者との間に成立するものが保育の過程である。幼児は、保育者のはたらきによって、その力を發揮して、人間として發達することができ、保育者は、幼児の中に發達を發見することによって、保育に対するよろこびと確信とが生じるのである。

保育の起点

保育は、幼児と保育者との間につくられる。幼児と保育者が顔をみ合わせたところから出發し、時間的経過の中で、子どもたちの活動は發展する。次に、この發展のいくつかの重要な時点をとらえることによって、保育の過程を明らかにしたいと思う。

朝

幼稚園の保育の出發点は朝、子どもが登園してきた時であ

る。朝、保育が出發するときの状況を、子どもと、保育者と、その両者の関係とそれぞれについて、明らかにしてみよう。

(一) 子どもの状況

朝、登園したときの子どもの状況は、子どもによっていろいろである。

1 めざめ

幼児のめざめ方は、個人によっても、その日によっても異なる。あるときには、満ちたりた睡眠の後に、きげんよく起き、親やきょうだいの生活の中に円滑に加わっていく。あるときには、小さいきょうだいに睡眠を妨げられ、親にせかされ、反抗や抵抗を示しながら起きてくる。幼稚園にくる前に、それぞれの子どもは、いろいろの状況で一日を出發させている。

2 身体的状況

その日の身体的状況も子どもによっていろいろである。身体的に好調子の子どももあるし調子のよくない状態で登園してくるものもある。

3 精神的状況

朝起きてから、幼稚園に登園するまでに、子どもには家庭で過ごす時間があり、通園の途中の時間がある。そこですでに

子どもは、いろいろの経験をしている。

ある子どもは、親からたえずせかされて、自分の生活の余裕もなく送り出されてくる。ある子どもは、きょうだいといきごころを起こし、叱られたり不愉快な思いをしている。朝食をしなからずテレビを見て、テレビに心を奪われながら家を出る子どももある。また、ある子どもは、本格的に遊びはじめたまま、それを中断して家を出るのが残念である。

ある日には、子どもは、幼稚園で、きのうのようなおもしろいことをしようという期待をもって出かける。ある日には、きのう遊んでおもしろかっただれちゃんと思つて、また、小さな物をポケットにしなばせて、友だちに見せてやろうと意気こんでくるものもある。ある日には、きのう先生は帰りがけに、「あしたまたこのつづきをしましょうね」といったからと期待をもつてくる。

不愉快だった経験を思い起こして、心も重くなることもある。友だちがこわくて、気のすすまない子どももある。幼稚園で並んでいる最中におしっこにいきたくなくなつたらどうしようかと心配している子どももある。幼児は、こういう期待や心配をめぐらした口に出さない。時間になると、親に手を引かれ、あるいは送り出されて、幼稚園の玄関にはいつてくる。

4 登園の前後の状況

子どもは、登園の途中で、いろいろの経験をしている。ビルの工事や道路工事を見ている。いつも通る道路に新しいいへいできた、など子どもの興味をひくものがある。途中で同じクラスの友だちに出会って、はじめて手をつなぐことができた日もある。

幼稚園に登園したときの周囲の状況も、その日によっていろいろである。ある子どもにとっては、自分が来たときには、すでにみんなは遊びはじめている。ある子どもは、いちばん早くに来て、先生とおしゃべりすることができた、また、玄関をはいったときに先生の顔が見えなかった、お早うございますといっても、先生は気がつかなかったなど、登園したときの周囲の状況が、とっさの間に、子どもの気持をひき立てたり、鈍らせたりする。

(一) 保育者の状況

保育を出発させるときの保育者の状況も、その日により、その人によっていろいろである。いろいろであるけれども、保育者は、自分で意識して、自分自身や環境を変えることのできる部分をもっている。最善の状況に自分をおくためにはど

うしたらよいかということをも考えることができるのである。

1 身体的状況

保育者も、身体的に不快なときには、幼児に対して向けることのできるエネルギーが少なくなり、保育活動に影響をもつであろう。保育者として最善の条件を保って保育をすすめるには、身体的に、その人なりに良い条件であることが必要となる。保育者は十分に睡眠をとり、疲労した状態ではなく、身体的に健康な状態で保育に向かうことは、良い保育をする上の重要な条件である。

2 精神的状況

保育者は、一人の人間として、家庭人として、社会人として、いろいろの問題をもち、喜びや悩みをもっている。それは表情や行動にもあらわれやすい。のみならず、保育者が自分の個人的問題にとらわれて、重苦しい気分ときには、子どもが目の前にも、子どもの状況を見ることができない。このようなどときには、子どもの目から見ても、保育者は親しみにくく、近づき難く見えるのではないだろうか。

子どもの側からいうならば、保育者の存在が、子どもの気持をひき立てたり、くじいたりするものである。朝、保育の出发点にあたって、子どもが保育者の顔を見たとき、そこで安定し

た気持を持ち、これから一日を始めようという張りを感じるものが重要である。保育者の存在そのものから感じとられるその場の雰囲気は、保育の発展のためにはたいせつな要素である。

子どもたちの遊んでいる中に、だれか一人、この遊びに夢中になっていて、よい考えを出す子どもがいると、その遊びはぐんと発展することは、多くの経験の示すところである。保育者も沈滞していれば、子どもの活動は沈滞し、保育者が張り切って輝いていけば、子どもの活動も伸びるであろう。

このことをよく示しているのが、倉橋惣三の「小さき太陽」という短い文章である。その一部を次に引用してみよう。

『よろこびの人は、子どもらのための小さき太陽である。明るさを領ち、温かみを伝え、生命を力づけ、生長を育てる。見よ、その傍に立つ子どもらの顔の、熙々として輝き映ゆるを。なごやかなる生の幸福感を受け充ち溢れているを。』

これに反し、不平不満の人ほど、子どもらの傍にあって有毒なものはない。その心は必ずや額を険しからしめ、目をとげとげしからしめ、言葉をあらあらしからしめる。これほど子どものやわらかき性情を傷つけるものはない。……

『こいねが希わくは、子どもらのために小さき太陽たらんことを』

これは詩的な表現である。しかし、幼児と保育者との関係の重要な要素を直観的に指摘している。幼児は保育者と接するときに、明るさをうけとり、心が外に向かつて開ける。(経験の開放) 保育者との間に温かみや親しみを感じ、心のつながりを感じる。(同一化) 力づけられる。(激励) 生長を育てられる。

(発達の経験) これに反して、険しい額、とげとげした眼、あらゆる言葉に出会うときに、幼児は心の殻を閉じる。(自己防衛) このような保育における人間関係は、科学的に分析するならば、どのようなものであるかということは、今後に託された課題である。そして、この文章は、今まで科学的に指摘しきれなかった重要なものをいいあてているのである。

保育者が子どもたちの「小さき太陽」となることは、保育の過程の死活を決する重要なことである。しかし、朝、幼稚園に向かうときの保育者の精神状況は、さまざまである。人間的に悩んでいるときの保育者が、どのようにするならば「小さき太陽」となることができるであろうか。保育の場に立ったときには個人的問題を処理して、子どもに向かう構えを要請されるのであるが。

一つには、子どもに向かうときには自分の悩みはわきにおいて、子どもとの人間関係にはいることのできる技術を見出すことであろう。もう一つは、保育者は「小さき太陽」となる役割をとることの必要を自覚して、自分自身をこのように向け直す努力をすることであろう。多くの優秀な保育者は、この問題をどのように解決してきたか知りたいし、また科学的に解明を必要とする問題であるといえよう。

3 子どもを迎える精神的準備

保育の場に立つ以前に、直接、間接に、保育に備えてなされる精神的準備には、いろいろのものがある。

一般的、間接的には、ひろく教育一般、人生や世界について考えをめぐらすこと。人それぞれに、教養や趣味もあり、求め、また、たのしむものがあり、それが保育者としての個性をもきめていくであろう。保育そのものには、どこの幼稚園、どの先生にも共通点がなければならぬが、人間同士のふれあいには、その人の中に養われてきた個性が出るのが当然であろう。

直接的には、その日の保育に備えて、どのような準備をすることがある。これも現実にはいろいろであり、綿密に考える人から、大ざっぱな人、あるいはまた、全く考えていな

い人もあろう。どのようなであるにせよ、それは保育の起点における保育者のあり方をきめる要素である。

直接的準備は、綿密にたくさんあれば、それだけよい保育ができるというものではない。どのような準備があればよいのかということを考える必要のある課題である。それは、人の性格によっても、日によっても異なるであろう。それに応じて、保育者が自らの力を最大に發揮し、幼児もまた、十分に力を發揮していくことができるようにするためには、準備段階としてはどれだけのものが必要であるかを客観的に研究する必要があると思う。

間接的準備、直接的準備の中間に、いろいろな段階の準備がある。幼稚園の教師として、よい保育ができるためには、養成機関においてはどのような経験が必要であるかという問題もある。

(三) 保育者が子どもの状況を認知するしかた

保育の構成要素である幼児と保育者が、保育の出発点にあたって、どのような状況にあるかについて述べた。この幼児と保育者が顔を見合わせて関係を結ぶところから保育が出発する。その出発点においていろいろの期待や、感情をもって登園した

幼児の状況を、保育者はどのようにして認知することができるかということが問題になる。

いろいろの背景をになつて登園する幼児の状況をことごとく保育者が理解することは、不可能でもあり、また保育にとつて必要なことでもないであろう。保育者として必要なことは、幼児が登園してきたそのときに、どのような感情や期待や意気込みをもっているかをそのままに感じとることである。

そのために必要な保育者の側の条件は、相手をわかろうとする白紙の心となつて迎えることである。別のことばでいえば、無構造の心の構えで迎えることである。

無構造ということ

構造化した心とは、いろいろの規準や標準をもって人を見る構えである。五歳の子どもならこのようにすべきであるとか、

このようにすべきでないというような規準をもっているときには、ある子どもの行動を見た場合、それは五歳児にふさわしい、ふさわしくないとか、よい、わるいというように見てしまう。その子どもがどのように感じ、どのように考えてそのようにふるまったかということを見ることができない。また、ある子どもをこういふ子どもだとときにきめてしまつてからその子

どもを見ると、その子どもがどのようふるまっても、その概念からぬけ出すことができない。

たとえば、ある子どもを乱暴な子どもというような概念をもつて見ると、子どもが他の子の肩をさわってその子がころんだだけでも、その子が乱暴をしたというように見えてしまう。

ある先生からきいたはなしである。

よく乱暴をして他の子を泣かす男の子がいた。その男の子が、向こうにかけていったので、また何かが起こるのではないかと思ひ、よびとめた。「乱暴するんじゃないよ」といひかけて、気がつき、「何しにいくの」とたずねた。すると、その子は「おしっこにいくの」とこたえた。その先生は、注意をしかけたことを、やめてよかったと思ったということである。

また、ある先生が語ってくれたことである。ある女の子は、軽い脳障害があり、一時期に、子どもの髪をひっぱったり、物を投げたりした。ある日、先生とままごとをしていた時に、その子はままごとの皿を手にとって、持ち上げた。ちょうど手が眼の上くらいにきて、先生は反射的に、自分の手を上げて防御した。するとその子は不思議そうな顔をして、「せんせい、何してるの?」とたずねた。その子は、ただ皿を置くこととしただけなのに、先生は無意識のうちに、また投げられるなど身構え

たのである。その先生は、本当に恥ずかしい思いをしたと述懐された。

落ちつかない子であるとか、不適応児とか、うそをつく子とか、情緒障害児とかも同様であつて、そのようなレッテルを貼ると、その子が何をしても、不適応に見えたり、情緒障害に見えたりする。しかし、その場合に、子どもにとって必要なことは、そこでその子が感ずていること、考へていることを理解してもらひ、そこで当面している問題を解決してもらふことなのである。保育者がそのことに気がついて、レッテルをはずして見るとき、保育者はその子の心の動きにふれることができる。

教育は、まさに、いつも乱暴する子どもが、たった一度でも他の子に親切をしたときに、その機会を逃さず、とり上げることによつてなされるものである。

朝、保育者が幼児を迎えるとき、いろいろの規準や既成概念をすてて、そのときの子どもにふれることがたいせつなのである。そうでないと、子どもがたずさえてきたいろいろのものに、保育者は気がつかない。そして、一日の出发点に、たいせつなものを見落してしまうことになる。

保育者が子どもの状況を認知してから、保育者が子どもと関係を結ぶ段階になるのであるが、以下は次号にする。

幼児にお話しするときの心がまえ

石 森 延 男



幼児にお話しすることは、楽しいことにちがいありませんが、また、たいへんむずかしいようにも思われます。

いくらか年をとった子ども、小学一年生、二年生にもなれば、多少おもしろくなくてもじっとして聞こうとする気持もあります。幼児には、そんな努力は、まずありません。

おもしろくなければ、たちまちそっぽ向いてしまいます。えんりょもしなければ、がまんもしません。よそ向きをするだけではなしに、さっさとどこかへ行ってしまいます。

だいいち幼児は、注意力が長つづきしないからです。気をつけて、お話に心を向けている時間は、まことに短いものです。その短い時間を、たいせつに、うまく考えてお話をしないと、せっかくなのお話もむだになってしまいます。

このほか幼児たちの聞き方、聞く力をよく知っておくこと

が、どんなにだいじか、いまさらいうまでもないと思います。

ここでは、そのような幼児に向かってお話しするときの心理学的な疲労度とか、緊張持続時間などに対する心がまえをいいます。そうではなく、お話そのものの中味とか、口でお話するときの注意めいたものをいくつか述べることにします。

はじめに、どんなお話を喜ぶかということについて。

(1) 耳に快いひびきをもったもの

こういっても、ぼんやりしていて、わからないかもしれませんが、次のようなことなのです。もの音など、それらしく歌うように話してやります。風の音、雨の降る音からはじまって、電車の走るひびき、波の音など、つまり擬音語のたぐいをお話の中にとりいれる。

すると幼児は、ことばだけよりも、ずっと生き生きとそのものの情景を思いおこすことができるからです。

あるいは、鳥やけものの鳴き声をまねて聞かせてやる。つまり擬声語のたぐいである幼児は、生きものがすきだから、いっそう喜ぶ。

(2) くりかえしのあるもの

同じ擬声語にしても、擬音語にしても、ただ一回だけ使うよりは、適当なところで、二ど、または三ど使うと、幼児は、そのひびきになれ、親しさをおぼえる。また、いいはしないかなと期待さえもつ。

ことばのよき繰り返しは、あるリズム感を生み出すことになり、音楽的な快さもわきたたせる。

(3) 歌をおりこむ工夫をする

お話の中に、メロディーのやさしい音楽、歌をうたってやることは、どれほど幼児を喜ばせるかわからない。対話を歌にしてもいいではないか、あるいは喜びを歌であらわしてもいいではないか。むずかしいことをいわないで、かっくに作曲して、楽しみつうたうことである。

(4) できるだけやさしいことばで

幼児のもっている語いの数は、いたって少ないから、その少ないことばの範囲内で、お話をするのが肝要である。でない

と、いくらお話をして聞かせても、わかってももらえないからである。

むずかしいことばを使っておとなたちに語るのはむしろやさしいが、幼児に理解させるように語ることは、難中の難である。

やさしいことばとはなんであろう。とりもなおさず幼児の生活の中に根をおろして生きていることばである。だから幼児に話をして聞かせようと思うならば、まず幼児語の調査、研究からはじめなければならぬといっても過言ではない。そうしてふだんから幼児語の蒐集、分類、応用などに関心をもつべきであらう。

(5) おもしろいお話であること

よくおもしろいお話というが、この「おもしろい」が、なかなかの問題である。わたしは、次の六つほどの要素を考えている。

(a) ロマン性に富むもの

じぶんの思いが、たちどころにかなうような世界である。

こうあってほしいと願えば、それがあつというまに実現するといったおもしろさがお話にはほしい。幼児は、まことに自由奔放な空想を描く、どうていおとななどのおよぶものではない。そんな時代に、よりゆたかなロマンを心象させることは、教育的にいつでもねらいのあるものである。多くの名高

い童話が、いかにこのロマン性にかがやいているかを見てもうなづかれるであろう。

(b) 冒険性のあるもの

思いきって自分の力をためしてみろといった、こわさを抱きながらもやりとおすという強さにあこがれる。幼児にはまだそれほどはげしい冒険性はないにしても、だれもやっていないようなことを平気でやろうとする興味はもっている。そんな気持を満足させるようなお話は喜ばれるにちがいない。

(c) 悲劇性のまつわるもの

あまり悲しみの深いお話は、幼児の心をいためるから避けねばならない。けれどもいくらか、あわれみをかけられるような主人公の登場するお話は、幼児とても感動は深い。ただのお涙頂戴ふうのものではなく、なにかのために、つい悲運におちいったような主人公を見せることは、けっして避けるべきではないと思う。「シンデレラ」のごとき、「マッチ売りの少女」のごとき、いずれもある悲劇性をおびたものでありながら、けっこう幼児のものとして用いられている。

(d) 喜劇性をふくんだもの

お話の途中は、いくらか悲しいものでてこよう。暗いできごとにもであるが、終りは、「めでたし、めでたし」でありたい。つまり喜劇ふうにまとめたものが好ましい。でない

と、幼児はおちつかないし、不安にかられるからである。「ああ、よかった」と安心させたいし、満足させたい。ただしむりなしめくくりをして、お話を不自然な形で終わらせることはおもしろくない。

(e) 変化のあるもの

お話のすじに、変化がなければおもしろさはともなわれない。単調のものであれば、幼児はたちまちあきてしまうからである。といってあまり変化がはげしくて、前後の関係がこみいって、重複するようになっては、わかりにくくなるから、考えねばならない。

伏線があり、漸層的に高まってきてお話の山にとどく。そこから一気に終末にいたるとい形式が、いちばん安定したものだらう。

以上五つばかり、いわゆるおもしろいお話というものの要素をひろいあげてみたが、このうち、一つでも備わっていれば、まずおもしろい話になる。

そうしてそのお話の中に、前に述べたような快いことば、ひびき、繰り返し、リズムといったことを心がけてもらえば、幼児は、目をかがやかして聞きほれること疑いなしだ。

おしまいにだれしも知っていることであるが、つい忘れがちな心がまえを念のためつけ加えておこう。

それは、仕草と表情のことである。

たとえお話が、単純素朴で、一見おもしろそうでもなくとも、いったんそれが話手のうまさにかかると、見ちがえるほどおもしろく、曲のあるものに変貌してしまうものである。

それは、話手の表情と仕草とによる。表情と仕草とは、お話の登場人物を目の前に浮き出していられるからである。お話を動的にするばかりではない、立体ふうに行行まで、ひろげるからである。

おとなは、そうでもないが、幼児は、お話のふんいきをたいへん好むのである。むしろそのふんいきに酔いたいのである。だから同じ話を二度も三度も聞いてなおかつあきない。あきないどころかささらにそれを求める。酔いたいのである。でなければ、すでに熟知している筋や人物などを、そんなにうるさいほど求めるわけではない。

ただ、表情も仕草も、過ぎたるはおもしろくはない。お話のふんいきを荒っぽくするのみならず、品を落としてしまうからである。このころのかねあいが、幼児にお話をしてやるべきことというものと思われる。

そのむかし、わたしは久留島武彦さんや岸辺福雄さんのお話にたいへん打たれたものである。それはお話の中味よりも、そのお話を生かすように口演する仕方に魅せられたものである。

わたしのようなおとなたちも、喜んで聞き入り、笑い、悲しみ、同情し、怒って、引き入れてくれるばかりではなく、園児たちは、それ以上にうつつをぬかしているのだから驚嘆せざるを得ない。

話術などはどうでもいいという人がいる。しかし幼児の場合に限っては、これはあてはまらない。けいこを重ねて話術をわがものにしたときに、思わざる功德を感じるにちがいない。

幼児教育講習会

主催 日本幼稚園協会

お茶の水女子大学附属幼稚園内

日時 昭和四十三年七月二十二日（月）より

七月二十五日（木）まで

会場 お茶の水女子大学講堂

●詳しいことは、次号でお知らせいたします。

幼稚園の教師に望むもの

教師の創造性と幼児の創造性 (二)

飯 田 泰 造

子どもの創ることを表現として見るなら、自分から積極的、意志的にする活動を示しているものであろうから、その姿がはつきりしてくるのは五歳以後のこととなるであろう。

それは為すわざであると同時に成つてくるものと考えられる。

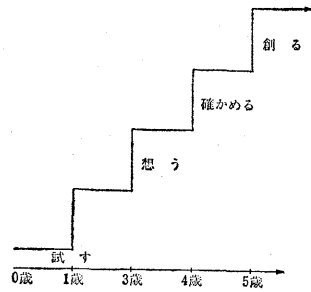
為すわざとは自らを作ろうとする力であつて、そののみが強い為すわざとは自らを作ろうとする力ではなく、真実を離れてしまふ。

とその子どもの内的な活動ではなく、現実を離れてしまふ。それは本来のものでなく、味である。為すわざは造形性とか思考力とかくふうする力であつて、もちろんこれもこの年齢段階では必要なことであるが、同時にこれは為すことによつて成つてくるといふ、その子ども本来の姿がそこに現われてくるものでなければならぬ。

この二つの働きが調和されたとき、子どものよい表現が見られ、よきや美しさもそこに見られるのではなからうか。

成るとは子どものイメージーションであるといえる。為すことをおし進めるには教師は素材を用意してやったり、表現の方法を刺激したり、また、ある場合には教えることも含まれてくるであろう。しかし成るわざは教えることはできない。個々のものであつてこれは育てておかねばならぬことである。

このような創る活動に至るまでには、いくつかの発達の段階を経てくるものであつて、表現にはこの前段階がきわめて大切に考えられねばならない。それが創造的になされてきたかどうかが大きく作用すると共に、幼稚園や家庭においてその後もなおその不足を経験の中で充足していかねばならないと考えられる。これは少しく説明を要することであるので図式的にまとめて考えてみよう――。



☆「試す」ことの

大切さ

生後数ヶ月の赤子が手を振りまわしたり、何でも口に持っていったり、やぶったり、割ったりしてみるしぐさは、一見何ら無意味な動作のように考えられるけれど、その中にはたいへん重要な意義があるといわれる。無意識的に外界を自分のものにしていく（マスターする）ことであるからだ。

（成人でもそのものによって表現するに際しては十分にその素材を自分のものとしてかかることが必要であるように）後々幼児が表現を自由にするにはこの前段階がとて大切であると考えねばならない。

それははいじくることであり、試す段階である。造形的な活動について考えてみるならば、赤子は運動感覚的なこのようなしぐさをしているうちに、クレオンとかチョークとか描けるものをもてあそんでいると、そこに描けてたことを見出して喜ぶであろう。文字通りこれは錯画であり、なぐりがきであって意味のないもの

ではあるが、こうして試していることが次の段階への準備となる。

ことばでいうならば、これまでは泣くとか笑うとかであろうが、次第に親や四圍の者のいうことばを真似て、おうむ返しに事物や動作などを結びつけていく。こうしてものを知っていくのであろう。

三歳児はずいぶんと外界を知り得て、不確かながら概念もふえてくる。それはことばでいえるということと表わされる。

そのとき、幼児は錯画的に描けた空間の中に、自分の知っているものを見つけ出すであろう。これはとても大きな発見であり、進歩である。すなわち一つのものから他のものを想う、連想の働きであって心の中に新しいものをつくり出していることであり、想像である。

これは創造性の胚芽であろう。

ことばでも次第に自分の気持がその中に含まれるような表現の仕方をするようになってくる。

☆「想う」ことをはげませよう

二歳八ヶ月の女の児は柱の節穴を見ては「ニャーニャー」といった。

三歳の男児が夜空を見上げて「オホシサマがピ、カッ、テルヨ」

といった。ピカピカ光っているということの気持をいっている。
「テレビを見ていた三歳半の男の児が「オニイチャントオネエ
チャンがウレシコンデルヨ」嬉しそうに喜んでゐる意をいっ
ている。」

この年齢の子どもはもう親や四囲の真似をするだけに止まらな
いで、それをのり越えてつくり出ししていく働きも見られてくる。

三歳という年齢は誠に想像力の旺盛な、また伸びる時期と考え
られるので、あらゆるで、だてによってそれを伸ばし、はげますこ
とが大切である。

母親が豊かな夢をもってお話を語り聞かせてやったり、美しい
歌を歌ってやり、音楽を楽しむことも大切であろう。また、今で
はすばらしい幼児向きの絵本も出版されているのだから、ぜひと
も豊富に正しく与えてやりたいものである。

子どもの絵を描く活動は、まだ錯画であるのだから、まだまだ
形をせっかちに要求するのになしに、そこからいろいろ面白いイメー
ジを引き出すことを重視していくべきである。絵だけでなく、
積木や、想像的な玩具や遊具も子どものイマジネーションを豊か
にしていく創造的な環境づくりの大切な役目を果たす。

ただ、いつでも人為的なものだけでなく、自然のなまのものを
取り入れることを忘れぬようにしたい。うっかりすると雲一つよ

く見ることでできない都会の生活の中にも、見出しうる自然はあ
るもの、子どもと一緒にたつてそれを見つけ出し、感動しよう。

「おもしろいな、美しいな！」と喜んだり、驚いたりすること
が大切である。そして子ども自身の発見を大切に、とり上げて
やろう。この年齢の子どもの発見などはまことにた、あいないな
であったり、下らないものであってもそれをよく発見したなど認
めてやり、はげましてやるのが大切である。

「四歳の男児が母親と戸口に立っていると、ごみ屋が清掃に
て自分の家のごみをきれいにして行つた。その後姿を見ていた
男の児が「アノオジチャン、キップクレッテドウシテイワナイ
ノ？」と不思議そうに尋ねたのである。母親はしばらくしてか
らそれがバキュームカーの清掃との比較であるのに気がつい
た。」

子どもの発見を認め、はげますということは、そのときすかさ
ず与えねばならぬものであつて後からでは効は薄い。

このように「想う」ことをはげまされ、経験してきた子ども
は、もはや漠然と知っているだけの概念でなく、確かなものにし
ようとしはじめ。

☆「確かめる」ときに広い経験を

三歳の後にくる反抗期は「どうして?」「なぜ?」という質問期でもあるように口うるさく問い質す。そうしてことばも豊富になっていくが、いろいろ遊びの中や、絵を描くことでもそれやっている。

この年齢の子どもの絵はカタログ的表現といわれるように、一枚の紙の中にばらまくように、自分の知っているものをなんべんとなく描いてはためし、描いては失敗して描く。上下左右の空間関係など無視して描いても、その一つ一つが自分にとっては対象支配なのだから意に介しないで繰り返し描いている。描くことによって概念を確かめているのであるから、たくさん描かせて確かめさせたいわけである。

当然このような段階であるから、子どもの日常生活の中で豊富な経験がなされていることが大切であるし、その経験を土台にしていろいろなものを描いていくであろう。

経験をするとか、認識を深めるとか、いろいろなものをじっくり見つめることをおしすすめてやることも、ここでは創造性育成の要件と考えられる。「確かめる」段階である。

このようにして再三再四描いたり、質問したり、試行錯誤をしたあげく、自分なりの概念ができあがると、一応自身をもって今度は表現を自らはじめる。

五歳児はもはや四歳児のような自然発生的な(成ってくる)ば

かりの表現ではなくなり、ここまでかかって作られてきたその子の様式を駆使しはじめ。もしも様式によって絵を描くことが単に判をおしたようなものに止まったなら、つまらない表現になり下がってしまうのだが、ここでこれまでに創造的に——ということとはそれぞれの発達の段階を、その意義に沿って十分に経験してきた子どもは、その様式を変形して駆使するのである。

為すわざの中に豊富なイマジネーションを働かせてその子どもの心が成ってくるのである。感動や情緒性によってその様式が著しく自由に変形されてしまっていることによってその子どもが語っているのである。

それはその子どもの生活がそこに土台としてあり、経験が躍動し、物語っている。物語らせねばならないともいえよう。このような表現は、すばらしく、子どもらしく、真実でまたそこによきや美しさを含んでいるであろう。それは絵に描くことによって物語ると同時に、ことばでもいっているのだからそれを聞いてやることもはげみとなる。

ことばはこの年齢に急速な伸展をみ、早い子は文字を読み、書き、簡単な文章をつづる。そして入学という順序であろう。

このことから考えて、創造性の豊かな子どもとは、それぞれの段階において、「試す」ときには十分に試し、「想う」ときには想うことを十分にし、「確かめる」段階では十分に確かめる経験をし

てきたということではないだろうか。そしてやがて「創る」創造の段階では自分のそれまでに積み重ねたものの上に、思考力を働かせ、くふうを加え、表現（造形）する力を得て、よい表現をするであろう。

子どもの創造性を考えるとき、イマジネーションという感覚的な力が大切だが、芸術的な創造だけでなく、このように考え出したり、くふしたりする知的なものも含めて考えなければ片手落ちであろう。

これらは一つに総合された活動となる。そのどちらを上げますことも創造性の育成には大切であるが、全体的、総合的になされるねばならぬことである。

「製作」活動などは表現にあたってずいぶん思考力やくふう力が要求され、技術も加わってくるがそこで望まれるものは決して感覚的、芸術的なものを捨ててしまうのではなく、その子どもの想像力や自身の感情が深く関わっていてこそほんとうのものとなるであろう。

（この意味で幼児には理科工作とか実用工作というようなものはない）

☆幼稚園を見まわしてみよう！

子どもが、自分の体験からやったとしても、自ら新しい経験に

たち向かっていく姿には創造の姿が見られる。それは何かをやるうとし、積極的で、輝きのある態度である。

遊びをつくり出す、何かを形づくる、自分の気持をことばで伝える、音楽的に表現する、体をリズムミカルに動かす、等々もその子どもの表現であれば、そのような中に創造の姿が見られる。

さて私たちはそのような動きや伝えかけをばまし伸ばすように環境を整えてやっているだろうか。雰囲気をもそのようにかもし出させているであろうか。そんな面から見まわしてみると、……ブランコ一つにしても合理的で堅牢な（教師にあまりやっかいをかけない）今様のものは、そのような子どもの心の動きの振幅を縮めてしまうものがありはしないだろうか。

子どもたちは、あるときはその一本をはずし、自然木の枝に掛けて空想の翼を広げようとしてもそうはいかない。滑り台を滑るにしても、約束にしばられて子ども本来の想像豊かな遊びを制約されてしまうことがありはしないだろうか。子どもは一本の綱を見つけてきてしぼりつけ、ターザンになり、ロッククライミングを試みる。（危険はあくまで周到にきけねばならないが）あまりに神経質になるとそれをおしつぶしてしまう。ひ弱さやきれいごとが幼稚園という体質の中にありはしないかとささやかれたりもする。

それは創造性の育成にとってブレーキとなるのではないだろうか

か。遊具や庭の環境についてももう一度見まわしてみよう。

それは保育室についてもであって、家具や道具の置き方、場所についても創造的な心ぐみをもってみよう。これは教師としての努力点であろう。

そして日常生活の中で「なぜ?」「どうして?」と質問の出でくるような素材を用意してやることは、くふうしたり考える力の根っことなり、科学する心の芽を育てることなのだから大切にしよう。それは決して理科教育や知識のつめ込みをしようというのでなく、それらの土台づくりであり、創造性という人格形成のわざなのだと思いたい。

これは今のことなのだが、前の段階がとても大切だと考えてきた。もしそれが不十分と考えられるならば補足してやらねばならない。試すこと、想うこと、確かめること……。 (それは不十分なことの方が多いと考えられる)それが泥んこ遊びや粘土遊び、フィンガーペインティングやちぎり紙の活動であると考えたい。自由な音楽的表現を考えたり、想像を豊かに誘う絵本の適切な与え方を考えてやることもある。

先生とする親味なおはなし(童話) もちろんであり、肌と肌のおふれあいの生活の中に子どもの創造性は地味に徐々に育っていくものではなからうか。

(上ノ原幼稚園)

日本保育学会 第21回大会

会期 昭和四十三年五月十八日(土)

五月十九日(日)

会場 宮城学院女子大学

仙台市東三番丁一六六

内容 (イ) 研究発表

(ロ) シンポジウム

(ハ) その他

連絡先 仙台市東三番丁一六六

宮城学院女子大学内

日本保育学会第21回大会準備委員会

TEL—〇二二二の二二の六二二一

一学期の抱負と展開

—実践のなかにみられる 幼児の発達の姿をおって—

柴 田 い つ

(一) はじめに

新しい幼児たちを
迎え、まず教師とし
ては、昨年よりまし
て、よりよい経験や
活動を——と抱負や
願いをもちます。と
同時に、就学一年前
の教育として、それ
らは、どのような内
容であればよいの
か、つまり教育の本
筋にふれていきなが
ら、どんな幼児に育
つてほしいのか、な
にをどのように伸ば
してやればよいのか
などの基本的な問題
を、はつきりつかん
でいかなければなら

ないと思いません。

昨年度をふり返ってみますとき、卒直にいつて、ひとりひとりの幼児が、自発的にのびのびと行動することの成長は一応つかめたように思うのですが、その幼児の活動の意味が、五歳児としての発達に見合った教育的な価値のある経験であったかどうかといった点では、疑問が残ったのです。また、「ひとりひとりを尊重する」ことのねらいが、ほんとうの意味の幼児を理解し、尊重してきたといえるかどうかということ、つまり、幼児が満足していれば、一応のねらいは達成されたものと安易に考えていた面や、幼児の発想を大切に、さらに遊びの発展にかかわって、幼児らの考えや行動をよく理解するなかで実践してきた教師としての役割や指導内容についても、もうすこし話し合っていく必要を感じました。要は、ひとりひとりの幼児たちの要求を十分に表出させ、そのなかでの教育的な価値ある経験を、発達の課題を達成することのなかで育ててきたかということ です。

このような反省から、本年度としては、あくまで幼児の感情を受容し豊かにしてやるなかで、教師は、幼児の成長をもっとはつきりつかんでいきたいと考えました。つまり、本年度の当園の目標は、「遊びのなかにみられる幼児の発達と教師の指導」としたのですが、それぞれの時期における経験に、幼児たちのとりくみが、どのように変化し成長していくのか、日々の保育の積みあげ

のなかから育ていくものを、教師はどうとらえ指導していけばよいのかをみていきたいと考えました。

また一方、母親の希望も、「のびのびとなんでもよろこんで行動できる子に」とか、「はっきりものがいえ、集団生活を楽しくやれる子に」などの態度形成面の要求も、かなり多くなってきましたので、私たちは、この一年間の発達からおさえて、大まかな見通しのなかに、学期、学期にみられる幼児の成長を、その段階で反省していつてみたいと思います。

(1) 一学期の実践から

そこです、この一学期としては、入園後の日々変化していく幼児の姿のなから、幼児をとりまく、まわりの条件にかかわって、幼児たちが、いかに自己を表出させていこうとしているのか、という面を中心にして、実践のなから、幼児の興味、意欲や自信、思考や協力のめばえなどが、どのようにして育ってきたかということ、パーソナリティ形成の中核である豊かな情緒の発達——逆にいえば、入園までの家庭生活において、十分に経験されねばならなかったことに対する治療ということになる——ということと関連させて、拾いあげてみたいと思います。

(1) 「M子の関心」

——興味のことぐち——

ちがった環境に入っても、幼児たちのほとんどは、物を媒介として遊べるようです。入園後の幼児たちは、遊びやすいふんいきとまわりの条件によって、いっそうその動きは活発になってきます。でも「あつ、おもしろそうだな、ぼくもやってみよう」という気持と動作とは、必ずしも一致しない場合、つまり、遊び方がわからなかったり、なんとなく物おじして手をださない幼児や、「どんなことでも先生にいうんですよ」とたえず母親にいわれていような場合は、気軽に遊べません。こういった消極的な幼児も「かごめかごめ」などをして友だちと手をつないだり、ちょうちょうやはちになって遊んだりすることによって、だんだんと気持がほぐれていくものです。でもそういう時期をすぎても、たえず教師のさそいかげがなければ動けない幼児もいます。そのような幼児には、なんとかして、興味をひきだしてやりたいと一日の生活のなかでチャンスをまったり、意識的に働きかけたりしていきます。

M子は無口で入園後一週間目にやっと教師の問いかけに、「うん」とか「ちがうの」とか自分の意志で返事をしてくれるようになります。友だちの遊ばせは伴いません。友だちの遊ぶようすを、じつと傍観しているので、M子の手をつなぎ、「ごちそうたべにいきましょうね」とままごとコーナーへいったり、砂場での

山づくりや、遊動木にいっしょに乗ったりして、気持を少しずつ開放してやっていました。

入園後の十日目のことです。三、四人の幼児たちが、黒板に信号機を描いているのを、M子は、いままでにはない興味のある表情でそれをみていたので、私はM子の気持がとらえられるのではないかと思いましたが、それでも直接M子にぶつかるとは、どうもうまくいきそうでないので、黒板に描いているグループにいて、「T君、信号機の横のな—に？」ときいてみました。Tは、「あのね、これ歩道橋、ぼく渡ったに」といい、さらに、「歩道橋さ、ふわふわってするに、兄ちゃんが走ってたら、ぼくふわふわしてこわかったに」と、身振りをまじえ話してくれるTをみていて、M子ははじめて、にっこりとして聞いてくれたのです。

この歩道橋は、最近新設されたもので、あとからわかったのですが、M子も祖母と渡ったらしく、共感を覚えたのでしょう。

「ふ—ん、そんなにふわふわするの？ Mちゃんも渡った？」と教師はM子にきいてやると、「おばあちゃんと」とぼつり返事をしてくれたので、「そうMちゃんもこわかった？」ときくと、「うん」といっただけで、またもとの無表情にもどってしまいました。そのうち、Tは歩道橋につづけていくつかの道を描き始め、「ぼくのうちはここ」「わたしのうちは、ここ」と、H、K、A子、W子などまじって賑やかに描きだし黒板に絵がいつぱ

いになったため、園庭にいつて描こうと教師は提案してみました。

そのとき、M子は他の幼児にまじって、自分から靴箱にいつて下靴とかえだしていました。いつも促してばかりいたM子なのに、ここはチャンスと思い、教師も幼児たちといっしょにはずんでかけだしていったのですが、みんなはさっそく石ころを拾ったり、竹で大きく線をかいたり、家を描いて遊んでいるに、M子はやっぱりみています。「はい、Mちゃんにこれあげるわ」木片を与えてやったのですが、それを持っただけで描こうとしないのです。教師はじれったい気持になりましたが、この段階では、M子にとつて、教師の手をかりずに、仲間のなかに、ひとりではいれたことだけでも進歩だったのに、関心をもったからすぐ描いてほしいと思うのは、教師のあせりだと気がついたのです。

近道をするのでなく、この幼児のもつ成長にあわせて、じっくりその場の判断をしてやらねばと反省いたしました。このような考えのもとに、今後できる限り、M子の動作・表情・興味をみつけどし、思わすのりだしてくるような機会をつくってやりたいと考えます。そしてひとりの幼児を伸ばすための努力は、ひいては、全体の幼児の興味をも広げてやることになるのではないかと思うのです。今年の実践においても、このような問題は、また再現されるのではないかと思います。ひとりひとりの幼児の、そ

の幼児なりの園生活への適応をじっくりみつめて、あせらずに、あたたかい気持ちで見守ってやるなかで、情緒の安定や、満足をきせてやりたいと思います。

(2) 「こいつがわるい」

——友だちの存在の意識——

五月の幼児たちは、自己主張が盛んになり、口争いも多くなってきました。また反面、これまで元気に遊んでいた幼児が、ちょっとしたはずみで急に泣きだしたりして、幼児たちの行動にもいくつかの変化がみられてきます。「ぼくが先みつけた」といって離さなかったり、チャンバラの始まるのも五月です。そしてもの珍しさもあり、興味本位で遊んでいた四月にくらべて、自分から遊びが選択できるようになってきます。したがって遊びがおもしろくなり、自我もできてきますし、自分の意志もはっきりと友だちに伝えようとするため、けんかが始まります。

そのけんかは、動機など問題にしないで、たいた、押したといったその場の行動の結果を中心に善悪を判断します。「こいつが悪い」と気の強い幼児は、あくまで主張してゆずりませんし、消極的な幼児は、引っ込んでしまうわけですが、でもこの時期の幼児たちは、けんかをして初めてお互いに相手を知ります。自我をどのようにして調整し、なかよく遊ぶためのくふうはどのような

にしていくのか、教師もそのための援助をしてやるべきですが、あくまで教師が説得的にのりだしてけんか両成敗にしてしまうのは、よくないようです。つまり幼児たちには、やはりそれぞれの理由があるのですし、この時期に理解できる範囲のいきさつを両方に聞いてやる必要があります。といってもそれは、感情が中心であり、論理的な言語による仲裁の意味がないでしょう。つまり、幼児のあいだに互いにしこりの残らないよう、またけんかというものを、頭からいけないものと罪悪視しないで物事に対する判断力をつけてやるためのよい方向づけを、教師として導いてやるべきでしょう。そして自分の立場を弁解するのではなく、自分の考えや、意志もはっきりいえるような習慣をつけてやりたいと思います。

ベビーオルガンの前で、KとMが、顔を真赤にしている争いを始め、側でK子が泣いているのです。KとMもお互いに「こいつが先たいたんや」といって互いにゆずりません。そのうちTやHと四、五人仲間が集まってきて、人気のあるKに加勢したのです。負けん気のMは、ますます興奮してKに突っかかっていくように、このままでは、幼児たちにまかせておけないと思って側へ寄っていくと、「またM君、K子ちゃんを泣かしたん」と側からN子も口出しします。MとKはよくいたずらするので、幼児たちも「また」といっていますし、教師自身も、簡単に

この場はなだめてやりたいと思っていたのですが、「ぼくってたかへんもん、K君がぼくをたたいたんや」と訴えるMの顔がしんけんなので教師も、「K君ぼくどうなの？」ときくと、「ほんでもK子ちゃんを泣かしたったんや」というのです。このけんかはK子が原因で、K子からもよくきくと、Mは、K子のスモックの袖を引っ張っただけで、それもテレビをみようといつて、「はよ、へやへこい」ときそいかけるつもり動作だったのでした。教師もこのMに対して、「また、やってるな」と思ったり、単なる衝突とみて、その場をすませようと思ったことを、強く反省させられたのです。

このことは、幼児たちのあいだに生まれる判断力が、リーダー的な存在に服従していけばよいものなのか、あるいは、「けんかは両方わるい」といったあきらめのようなものでなく、結果より動機を大切にすると考えた考え方に、少しずつでも向いているようになっていく過程を示しているのではないかと思うのです。そのためには、そのような発達に応じた教師の構え方が大切だと思えました。ささいな見過ごしてしまいそうな幼児の生活のなかに、実は大切なものがあるのだと思うのです。そしていたずらのM君にも親切なところもあるんだなあといったやさしさも感じるとするような、その場の教師の導き方も今後心掛けていきたいと思えます。

(3) 「ぼくのかいたんこれ」

——自信と意欲——

六月になると、情緒不安定だった幼児も落ち着きをみせてくるとともに、ばらばらだった遊びにもややまとまりをみせ、友だち関係も広まってきました。その反面、友だちの好き嫌いがはっきりしてきたり、教師への告げ口も多くなったり、「○○ちゃんにはないしょ」とか、「○○くんは、あっちへいけ」といって、仲間からはみだされてしまう幼児もでてまいります。そのために、折角遊びが発展していても、友だち関係でこわれてしまったり、長つづきのしない場面が多くみられます。また、「こいつは弱いから」「この子は下手や」といって友だちに対する批判のようなものもできてきますので、こういったなかでそれぞれの幼児たちが、互いにみとめ合い、みんなでやれば楽しいのだという実感をもたせてやりたいと考えます。

ある日、えびがにをとってきたSの発言から発展し、川にいる小動物を描いて、みんなで共同画をやりたいと教師はもちかけました。ほとんどの幼児たちは、興味をもって、さっそくやりかけたのですが、M子は相変わらず、やろうとしなかつたし、A、N、K子は、「先生、なんでもええの？」と心配そうに質問してきました。この幼児たちは、話し合いのときは、「めだか、どじ

よう、おたまじゃくし」などと元気に発言もしていたのに、さて絵画的に表現するとなると、自分のこれまで、気やすく描いていたものでないので、抵抗があったのでしよう。そして、教師の励ましで描いてはいたが、自分で「描きたい」という気持ではなく、なんとなく楽しさが感じられませんでした。

大いに矛盾を感じていましたが、その翌朝、登園後の幼児たちは、自分たちから（K子もまざる）おたまじゃくしを三つも描き、うしろの掲示板の曲折のある川の流れに貼りつけているのです。

そしてAは、教師の手を引っ張って、「これ、えびがにの赤ちゃん」と大きいえびがにの背中につたかawaiiいえびがにを指さしてくれました。ほんとうにかわいく、「ほら、みんなみて、これえびがにの赤ちゃんですって」と幼児たちにAの描いたこと知らせてやる。他の幼児たちもここに認めてくれました。しばらくしてK子も、「これも赤ちゃんやに」とおたまじゃくしの小さいのを教師にみせにきたのです。そのとき、M子もK子にももらったおたまじゃくしの一匹を手にもって教師の側へきたので、「まあ、ほんとうにかわいいわね、みんな泳がしてあげてね」といってやると、M子もうれしそうにとんでいきました。K子、Aのおたまじゃくしは、昨日と同じで表現そのものには発展はみられませんでした。また「めだかの学校の……」のうたをうたったり、「大きい

どじょうとえびがにがお話しとんの」と想像する幼児もでき、このあとのリズム遊びのときのM子も、友だちの模倣をしながらも、その動作には、幼児らしさを感じました。

このように、友だちといっしょにしごとをするなかで、幼児のもつ可能性を、幼児らの興味や関心の度合いをたしかめていきながら、少しずつでも深めてやるための援助や励ましは、教師として最も大切なことだと思えます。その過程のなかに育っていく幼児の自信は、次の段階へ進んでいく欠くことのできないものだと思います。ひとりの幼児の意欲やがんばりは、他の幼児への啓発にもなり、活動を楽しく発展させる支えになっていくものとして、今後の経験のなかでも、これらの考え方を土台として、幼児とともに進んでいきたいと考えます。

(4) 「A君ノはしごって」

——思考と協力のめばえ——

七月の幼児たちは、すっかり自信をもって振る舞えるようになり、中心になる幼児も目立ってきますし、「かけっこする子この指とーまれ」とか、「きょうパン持ってきた子手をあげて」などの誰かの発言に、連鎖的に楽しく反応したり、グループをくんでの遊びも多くなってきました。そしてみんなの活気が増すほど、遊びの範囲も広まり、材料をフルに活用してきます。これまでは、

幼児の遊びに、教師の提案や支えが必要でしたのに、この時期になれば、ほとんど自分たちでやっていこうとする気構えがうかがわれるようになり、幼児の創造性のめばえも、ぐんぐん育って行くのではないかと思われます。でも反面、突飛なことを平気でしてみたり、みんなできめたルールも大胆に違反したりしますので、楽しく遊んでいる姿に教師は安易になつてはいけないと思うのです。リーダーや、幼児たちの発言を尊重して、みんなの幼児たちが、意味のある望ましい経験をしていくための努力が大切です。

この日は教師はフィンガーベインティングのあと、きょうは涼しいから戸外でうんと遊ぼうと幼児たちにもちかけました。「Aくんたち、はしごであそぼう」とMの提案に、男児のほとんどは園庭に走っていく。「女の子もいれてあげてね」と教師は声をかけてやります。「おーい、これA君つって、」とKは、重い階段をつらうとしているし、一方MとWは「こっへはしごをかけよか」「こっちにしよか」などと相談しながら、足台二個を並べてそこへはしごを渡しています。

いままでの遊びは、平面的な配列、つまり、主として、教師の提案から発展した、わたる、はう、くぐる、などの身体的活動をいれた鬼遊びの変形でしたが、きょうの遊びは、はしご、平均台、足台、階段など組み合わせて何かをつらうとしているので

す。はしごを横に渡してどうもひこうきの翼らしい。後から走ってきたWが、はしごのつかかると、「あかん、そこひこうきはねやぞ」とAは説明しています。女兒も集まってきて、小さいベンチを並べて腰をおろしてみています。

そのうち、もう一個のはしごをもってきたHに、「あほ、ジェット機なんやぞ、それはいらん」とA、「これはちがうぞ、お客さんののるとこやんか」とK、「そしたらこっへおこか」と、A、K、Hで前翼に、はしごの前方をかけ、低い足台を後方において、そこへうまくはしごがのるように距離を考えているので、「もうすこし台を前の方へおいた方が安全よ」と教師も努力してやったのです。そのうち、女兒の坐っている椅子をかしてといてくるので、なにに使うのかとの女兒の質問に、お客さんの座席をつくるのだからと、女兒に椅子を借してもらう許可を求めています。「そんなら私たち乗せてくれる」とN子は条件をつけているので、「ほんとうね、たくさん乗れるように考えてよ」と教師も注文をつけてやったのです。

そのとき、砂場にいたA子、N、S子たちが、「先生！キーキ食べてちょうだい」と大きな声で呼んでいたが、教師は、この飛行機づくりをもうすこしみとどけたいと思い、「ちよっとまってね」と返事をしているうちに、AとHは、さらに足台の上にもう一段足台をつみ、はしごをその上へのせ、翼を二段式にしよ

うとしています。「そっちをもって」といわなくても、自然と気が伝わるのか、二人でタイミングよくのせている。「ぼく運転手」といながらMは翼の中央に乗り得意満面、お客さんもふえ、そのうち、ケーキづくりの女児たちは待ちきれず運んでくる。「まあどうもごちそうさま」と教師は葉っぱをあしらってあるケーキを食べながら、お客さんになった幼児たちにもわけてあげる。運転手は、KとMが占領していたが、他の男児は、このリーダーを認めているのか、役割を横取りしようとしないうで、客席で、「次はアメリカ」「次はイギリス」とアナウンスしているのです。女児も椅子に坐って飛行機に乗ったつもり表情です。

このような移動遊具を使った遊びは、大筋肉運動にもなり、重量もあるので、どうしても二人以上の協力があるのです。そこをねらって作成してあるのですが、一人の幼児の発想につられて仲間に入った幼児たちも、またそこで興味をもち、自分の役割に応じてどのようにしたらより楽しくなるかということや、さらに遊びを發展させるための考えもわいてきます。いままで奪い合いや、先を争っていた幼児たちも、友だちの意見もきいてあげるという態度もみえてきました。限られた部屋のふんいきとちがいが、幼児たちの園庭や園外での表情は生き生きとしています。このあと、食堂車に發展し、コックさんでもき、遊びの内容が変化していききましたが、そのプロセスには、幼児らの思考と協力のめげば

がよくうかがえたのです。これらの幼児らの發達を大切にし、教師はさらに望ましいものにするための配慮を当然考えていかなければと思います。

(四) 二学期への展望

このようにして、一学期は、人間的なふれ合いのなかで、幼児なりに楽しく多くの難関をのりこえてきたのではないかと思えます。でもときには、退行的な行動もみられました。がそれは別の面からみれば、これまでの家庭生活でのたりないことを補う治療的期間ともいえます。そのためには、素朴な遊びや活動を十分させ、認めてやる必要であり、十分な意義があると思われま

す。でも十分に自己を表面させたかという点については、やはりひとりひとりの幼児が成長や發達のプロセスを異にしていますので、一学期においてできるだけ治療することにより、今後の二期に期待することになります。

未分化から少しずつ分化していくその具体的な場面を、二学期の成長のなかで、望ましい方向へとさらに成長し發達させたいと考えます。つまり、とくに社会的行動の發達を中心として、それらにともなう、認識・身体的な面の發達をも含めて、幼児のパフォーマンス形成の中核となる豊かな感情を支える教育の場を提供してやるのが大切だと思います。

(四日市市立富田幼稚園)

子どもにみんなで遊ぶ楽しさを



関 恵 美 子

一、この子にとつ

てかけがえの
ない先生であ
りたい。

——四月十日

入園式の日

待ちに待った入園
式。

何年、この仕事を
していても、やはり
楽しく緊張するもの
である。どんな子ど
もがくるだろうとい
う期待は、裏返せば
どんな先生だろうと
不安な思いでくるこ
とだろう。
いい子であつてく
れますようにと思う
ならば、まず私がい

い先生になろう。

今年是一年生になったつもりで進もう。要領よく子どもをさばくことができるだけの経験をもっていることは、考えれば恐いことだ。あの新卒のときのように、汗をかきかき子どもの中の一人という気持をもってやろう。

式の最中もよくしゃべり元気なこと。

思ったより赤ちゃんでもなく、お兄さんお姉さんでもない。頭の中で描いた子どもの姿とは違う。びっくりしたのは、一人で立つとうという意欲を溢れるばかりその全身で示していることだった。とにかく、すぐく生命力の溢れた感じ、さりげない中にも、ひとりひとりの自己主張がみえる。これだ、これこそ大事にしていこう。——

新しい受持の子どもを前にして私はいつもこの感慨を繰り返したものだ。そしてこの思いは、年を経た今も変わらないし、いや一層底深い思いになっていくのだ。

あふれる愛と行き届いた保護の中で安心して生活していた子どもが、はじめて人の世に、その人生を踏み出す大きな転機。自分を受け入れ、慈しんでくれる分身のような心通う味方の人たちから、はじめて他人に接するおとな子ども、それが教師であり、友だちであろう。それだけに人間が人間を本当に心の底から大事

に愛し、お互い信頼の上で手をたずさえようとする大きな人間愛に育ってくれるためのすばらしい感動にしたいのです。

だから教師として、ひとりひとりのこの子との出会いを大切にしたいと考えます。

特に幼児教育は魂を育てる教育だけに、この受持のひとりひとりの子どもに対する愛、出会いの不思議さ、子どもが教師を選ぶことができないだけに、あのたくさんの美しい瞳が「私のために、いい先生であって欲しい」という声なき訴えに、私は心をこめて、しっかり受け止め、子どもをりっぱな人間として尊敬し、その心の主張を一言でも疎かにしない心のはり、鋭敏な感覚をもつて答えていかねばならないと思うのです。

ときに「あの子は先生運が悪くてかわいそうです」ということを聞くと、耐えられない気持になることがある。

できれば、お母さんでなく子どもから「私はいいい先生に出会ったので本当に仕合わせだった」といわれたい。これは教師たるもの一番の願いであろう。

しかし子どもは、幼くても仕合わせで、満足なときは、その態度でちゃんと示してくれる。クラス全体に活気があつて、ひとりひとりの背骨がちゃんとしていて堂々とみえる。そしてどの顔も利口そうで小さなことにも心が集中し、反応する緊張感がみられ、それでいてとても平和な明るさがあるのだ。

きつと無言の喜びであろう。

先生運というものがあつたら、これは運命ではなくて教師の努力如何にあつて人の力でかえられるものなのだ。

すべからく、幼い子どものために、私たちの精いっぱい研修で、すばらしい先生運に満たしたいものだと思う。

この子にとって、かけがえのない人生にかけがえのない先生になろうとする命題は、私にとって大問題なのが、むしろ毎日の子どもとの取り組みの中で、教師がその子をより知ろう、より生かそうと戦い、傷つき苦しみながら、教師自らの自己改造がよりよき人間として、少しずつ高まる中でのみ解決されいくのではなにかと思ふのです。

二、今年の保育のねらいと構え

ひとりの子を大事にしようということは、その子の精いっぱいしたことに対して、みんなで受け止め考えていく足がかりにしようとする姿勢を教師ももつことから始まります。異質なもの、何か不十分なものに対して、一つの尺度に照して、よいとか、わるいとか、上手とか、下手とか批判したり決めてかかるのではなく、そこに何かの意味と価値をみつけよう、自分の考えを確かめようとする構えを育てることは、たとえ、自分の考えや表現がみんなと違っていても、それに自信をもって赤裸裸に出すことができる

雰囲気作りにもなっていくと思うのです。

こうした教師と子どもの織りなす集団が、伸び伸びと屈託なく、それでいて、いいものには、ピシッと反応する生きた集団、雰囲気こそ子どもを育てるのだと考えるのです。

そこで今年、次の研究主題をもつことにしました。

「ひとりひとりに自信と意欲を育てる保育」

主題設定の理由

●ひとりひとりの絶対の独自さと、たくましい生活意欲をめざして

私たちは夢中で遊ぶ子どものありのままの姿の中に、ひとりひとりのもつ独自さに驚かされ、教えられ、恐れを抱くことがある。この絶対の独自さこそ、ひとりひとりの未来を包蔵した可能性であり、私たちは、どれだけ真剣に、そして慎重に、このことを考えただろう。

このひとりひとりが驚くべき独自さをもっていることは、いいかえれば、保育は一人を育てることに始まり一人を育てることに終わるといふことだろう。子どもに対する本質的な尊敬の気持を根底にもって可能性を発見し、たくましく育てることに徹しなければならぬと考えます。

●昨年度の反省に立って得た課題

子どもが本当に子どもであり、しっかり自らをもたせるのに、本当に遊びを楽しんで没頭させたいと考えて、昨年は、「ひとりひとりが生きて働く保育はどうすればよいか」という主題で毎日の子どもの取り組みの中で探り続けました。そして得た課題は、

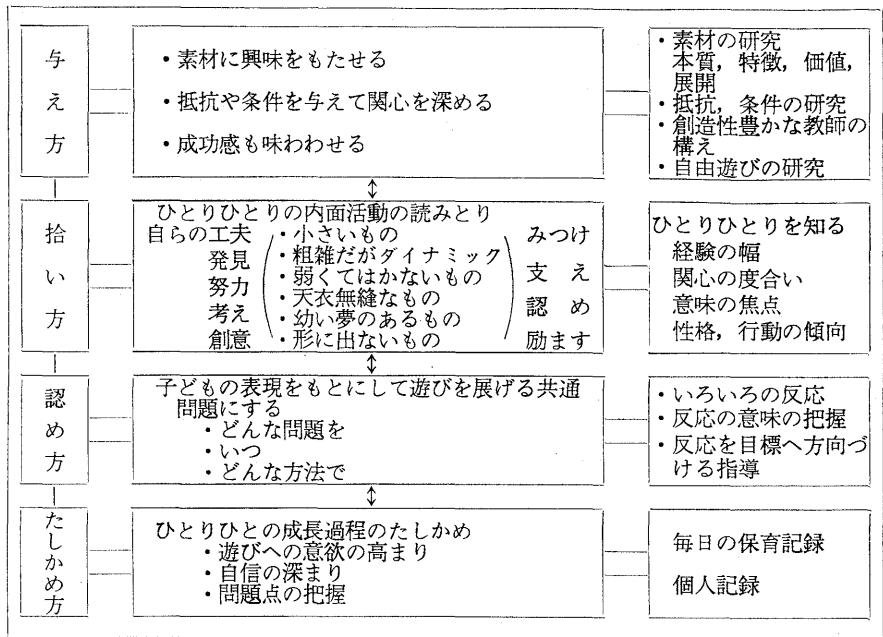
- 1 子どもが問題意識をもって取り組みためにはきっかけをみついたり、条件や抵抗になるものを、うまく与えることの大事さ。
- 2 子どもの個々の思いをたしかにつかむ大切さ。形に現われるものはもちろん、形に現われない内に流れるものをも、くみ取って本当にその子を知ることから、その子への適確な働きかけができ、このことを基礎におくべきだ。

3 自信を育てるには、仲間の支えや励ましが大きな役割をもつこと。

自分がみつけたこと、努力したこと、考えたことを仲間に認められ、励まされるとき、教師だけに支えられるより如何に大きな自信を得、また仲間をも励ますことか。こうして仲間とともに考える中に子どもは、人間としての望ましい態度や物の見方、考え方の幅が育つのではないか。

4 どんな質の反応も目標に近づく足場にしていくくふう。

子どものいろいろな反応の中で、ときには、むしろ教師の目標に遠く、相反した反応を取り上げることによって、みんなの子どもに問題が確認され、本物により早く近づくことを思う。問



題意識が漠然としている子どもも、こうした(→)反応が取り上げられることによって、より一層問題を意識づけられるのではないか。(上記表参照)

ここで私たちは、ひとりひとりが自分なりに考えよう、自分の力で努力しよう。創造しよう、抵抗も乗り越えようとする意欲を育てることの大切さを深く感じ、そして自分の考えや努力や創造力が仲間認められて得た自信が、また次への大きな意欲となつて育つことを思い、ひとりひとりに意欲と自信をしっかりと育ててだてを探り続け、可能性に満ちた幼児のひとりひとりに、たくましく物事を受け止め、乗り越えてゆく力と豊かな創造力を培いたいと思う。

三、一学期は子どもひとりひとりのあるがままの姿を適確に知ろう

・自然のふれ合いの中で
不安と喜びに入り混った四月。みたところてんでばらばらで、まるで自分そのままのようですが、その実は、本当の自分を包み込んで生活している子がたくさんいます。

こうした子どもに、一日も早くその包みを開いてやるためには、ひとりひとりを自然の中へほうり出し、ぶつからせてみよう

と考えました。

当時、私たちは「太陽と水と砂と生きものの中で遊ばせよう」をモットーにして、春は晴天であればほとんど園庭で遊び過ごしました。太陽や水や砂は子ども心の扉を一枚ずつ開けてくれるように、小さな花や生きものは、ひとりひとりの心を和ませてくれるようにと願ったのでした。

入園式の翌日から各組とも園庭いっぱいくり出しました。池も満員、砂場もいっぱい、花壇も、金魚や亀のいるプールも、芝生も子どもであふれました。

池のまわりは、えびがにすくい活気を呈しています。

おや、年少児が網をもってがんばっています。年長児が「そこにいるよ」「あつ、こつちにきた」と教えています。

友だちの後から覗いているいくつもの真剣な眼、——誰かが、バシャンとはまりました。わあ！心配そうな皆の目が、やがて、着換えてきっぱりした姿を現わすと、なるほどと思ってくれたようです。

この頃の時期は、全く生きものに遊んでもらっているようなものでした。

時々、これでいいのかしら、と疑問や迷いを持ちましたが、子どもたちの生き生きとした朝の出足は、例年に見られないものでした。

私たちは、いろいろな角度から子どもに働きかける必要があります。いいかえれば、四五人おれば四五通りの角度（その子を生き生きと遊ばせる働きかけ）があるはずですから、ひとりひとりが大好きで、自分流に粘り強く遊べるということから、自然とふれ合う生活は多くのものを得ることができました。

・子どもの心の自由を育てよう

この頃、子どもが家で「幼稚園は、ただ遊んでいたらいいから好きだ」といったのです。ほほえましくも考えさせられることばでした。

幼稚園は、本来楽しく遊ばせることであり、その遊びに子どもがすつぽりはまって没頭してこそ楽しいのではないでしょう。もし、かりに幼稚園の遊びを、させられるものと考え、思うとしたら大へんなことになります。

子どもが自分勝手に好きなことをしているんだ、というこの自由さから出発したいのです。子どもが、自らの行なおうとするときは、この心の自由さがあつてこそ、徹底的に取り組める粘り強さが生まれ、その中で、初めて物事の変化を発見したり、喜びをみつけることができ、遊びに対しても大きな意欲をもつことになります。

こうして夢中で遊ぶ状態の中から意外なその子を発見して、ひとりひとりの表と裏みたいな持ち味をみつけることがあります。

私たちは、子どもに赤裸裸に出させることを願ったのですから、そこに出てくるよきものを期待したり、そうでないものを否定するというやり方を、お互いに戒め合いました。赤裸裸の中に当然望ましいものと、好ましくない傾向もあるはずですから、その現実をこそ大事に肯定し、そこに視点をすえて、ひとりひとりの育ての出発点にしたいと思ったのです。

こうして、ひとりひとりが次第に一人としての個性を明確にしていくなかで、ひとりひとりの子どもの重みに驚き、ひとりひとりの違いに大きな価値を知るようになって、私たちが、いのちを燃やして対決しなければ、とても育てられない可能性の無限さを感じるのです。また、子どもが赤裸裸に自分を出して、心に自由をもって生活を始めると不思議に素直になり、物の本質を受け止めてくれる姿勢になることを知りました。

それは、小さな動きをちゃんと見つけ感じられる柔軟な心になり、小さな事実も、自分の目で捉え、それを感じて全身で活動するということが次第にその子のようすまでしゃんとした姿にするのでしょうか。

それだけに、ひとりひとりのどんな見方でも、捉え方でも、それをバシッと受け止めて、整理し、意味づけ、認め、さらに問題として再び返してやる幅のある仕事をしなければ、到底意欲をもたせたり、自信に積み上げていくことにはならないと思うので

す。

次の実践記録は、私の幼稚園のあるクラスが、池のおたまじゃくし取りをきっかけにして、教師と子どもが小さな発見を大事にしつつ展開していった遊びの一部です。

四、おたまじゃくしの遊び

二年長児
混成組43名

1、おたまじゃくしの池で

「おい！ この下にいる」

「シーッ!!」

「こっちから とつたらみつかる！」

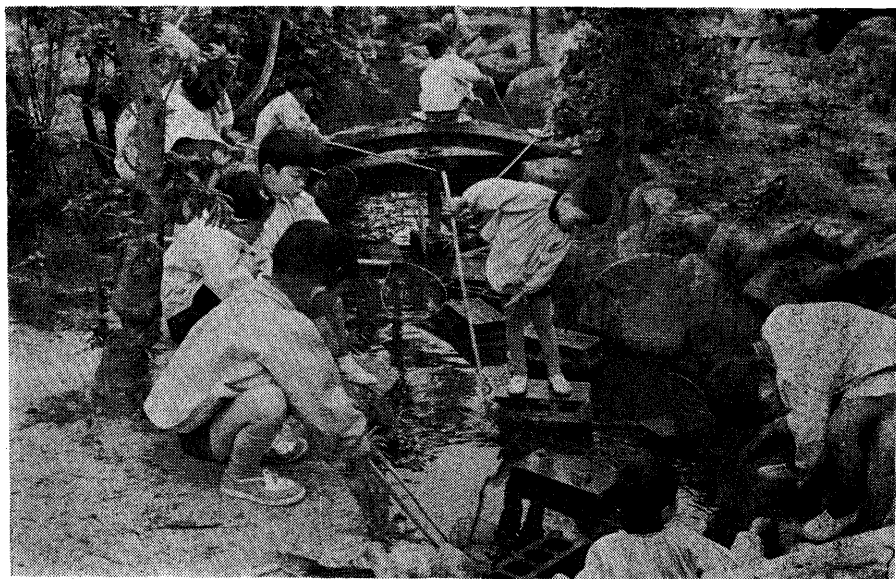
向こうから、向こうから……」

「I君！ うまくやりよ」

何といきいきと、おたまじゃくしに心をとめ、必死でくふうし、没頭しているのでしょう。中でも、日頃、集中力の弱いK君、無気力なIさんが、こんなに瞳を輝かせ、全身に意欲があふれています。

私はこの子が遊びによっては、こうも意欲的な瞬間をもつものかと驚きましたし、このエネルギーがきつと何かになるにちがいないと、明るい気持ちになりました。

きれいな水を入れ、よく見えるようにしつらえた水槽の中のおたまじゃくし、たらいの中の金魚、つかみやすい亀、動きのはでな



池でおたまじゃくしをとる

蛙など、子どもの目にも手にも容易に触れられるようにと用意したところで、遊ぶ子もいましたが、次第に自然の池のおたまじゃくしを見る子がふえ、池のおたまじゃくしを、とろうとする子も多くなりました。

そして、どうしてこうも真剣に追い続け、あきることなく挑み、より効果のあるとり方をと、くふうをこらすのでしょうか。何がこの子らの心をふるいたたせるのでしょうか。私は改めて、おたまじゃくしを見直すのでした。

「先生、おたまじゃくしは、つかめそうでなかなかつかめへん」という声もききます。たしかに、すぐとれそうでいて、安易にはとれないおたまじゃくし。子どもたちは、手を伸ばせば届きそうだという成功の見通しがありつつ、安易にはとれないぞという緊張感に支えられ、今度こそ！とやってみる——失敗する——またちがうくふうを加える——予想しなかった巧みな逃げ方——こうしておたまじゃくしとの対決の魅力が無限に続いているのです。そして、「とれた!!」という声が、ときにわき起こります。しかし十分もかかって、まだ一匹もとっていない子もいます。

安易に成功し、認められ、そうよ、そうよと受け入れられることで自信をもち、やってみようという意欲をもつ場合もあります。が、今、この子らが、かくもいきいきと取り組んでいるのは、すばやく逃げる、体がすべる、というおたまじゃくしのこの抵抗、

細心の注意をしても失敗に終わるといふ緊張感が、原動力になつてゐるのではないだろうか。

2、おたまじゃくしの池をつくろう

苦勞してやつとつたおたまじゃくしを、園庭で砂を集めて土手を作り、その中に水を入れて池におたまじゃくしを入れる遊びが何日か続きました。

もつと砂をたくさん運んで十分な高さの土手にしてから、水を入れるようにといふことを話しても、子どもたちは、浅い池におたまじゃくしを入れるのでした。



わあ、土手がくずれた！
おたまじゃくしの池づくり

おたまじゃくしは、大あばれる——さあ、これでは泳げないと子どもたちは大急ぎで水を運んでくる——低い細い土手がくずれる——大変、大変と砂を運ぶ——この繰り返しを、きやつきやつと楽しんでいきます。そして水もどんどんしみ込んでしまい、あわててまた水くみが繰り返されるのでした。

こうした一連の遊びを見ながら私は、こうしておかないと困るときがくるからとか、失敗しないために今こうしておくとかよい、といふことは子どもには受けつけられないのだと。水が流れてしまふ、おたまじゃくしが泳げなくなるという危険を自分の力で、うまく切り抜けた成功感、ああここが問題だと自分でみつけ、こうしてみようああしてみよう、と対処する緊張感、これがこの生き生きとした遊びを支えているのだと感じたのです。

3、おたまじゃくしになって、遊ぼう

みんなが、おたまじゃくしになって、泳いでいます。変な音があるとすぐに池の底へ沈んでじつとします。

今日も庭の池で、いろいろの逃げ方をするおたまじゃくしを何とかつかもうとして、あれほどくふうしているのですから、もつといろいろの逃げ方をするものと予想していましたが、沈んでじつとすることばかりでした。

子どもはきつと如何にすばやくもぐり、じつと動かずにいることに関心をもっているのでしょう。そこでつかまりたくない思い

で、いかにすばやく音を聞きつけ、深い所へもぐってじっとしているかということに、ねらいをおきました。

楽しく泳いでいたり、ゆうゆうと石にもたれて休んでいても、ちょっと変な音がすると、すばやくもぐるところがとてもおもしろくなって、うまくなってきました。

次に、「底の方にじっとしているのは、あれはおたまじゃくしじゃないかしら」と、池の中へ入っておたまじゃくしを探し始めました。見つかったは大変と、机の下や、あちこちへかくれる子があり、みつからぬ場所へ大急ぎで逃げるのが始まりました。

しかし、ただ、むやみに動きまわって逃げようとする気持の弱い子はつかまってしまいました。そんな子を「さあ、ここがたらいよ」といって集めておきました。ほどなく「出たいなあ」という声がきこえましたが、この子らを安易に逃がしてやっては、何度つかまったのだからとか、もっとこうして逃げようという意識をはっきりもたせることには、ならないと考えました。

みんなは、つかまりそうになっても、あばれたり、すべって逃げたり石の下へうまくかくれたり、うまく逃げるおたまじゃくしということが次第にはっきりしてきました。

たらいの中のおたまじゃくしを見てMちゃんが、「早く蛙になってピョンと出たらいのいいに」といいました。そこで私は「ああそうだ、大変、大変、ふたをするのを忘れていた」といって、し

っかりと大きなふたをする身振りをしました。

たらいの中で蛙になろうと、ピョン、ピョンしていた子も、池で泳いでいる子も、さあ大変だというようすです。そこで私が「あのおたまじゃくしどうなったかしら、もう弱っているかも知れない」と近よると、「死んだ真似したらいい」と大急ぎで、ふたの開くの待っています。『じっと、しときよ!』と声援がかかります。

私は「おや、みんな弱っている。これは死んでいるらしい」とFちゃんを抱きあげました。じっと固くなっています。床におろすと、さっと泳いで帰っていきました。

「おや、生きていたのかな」というと席にたどりついたFちゃんの得意そうな笑顔。「これはどうかしら」と一人ずつ抱きあげ「よくしらべないと、まねかもわからない」といいますと、「笑わんとき!」「目つぶるとき! 口あいて!」と大変な声援です。こうしてK、O、S君が次々と生きてかえり大拍手を得ました。私は、調べ方をちょっときびしくしていきました。「どんなことあってもがんばりよ!」と励まされ一層だらんと抱かれるのです。そしてみんなうまく逃がれ、よかった、よかったと大喜びでした。私は「残念だった、今度はもっとよく調べよう」というと、一人の子が、「ぼくは絶対つかまらないぞ、モゴモゴの中へ入るもの」といいました。

4 モゴモゴとおたまじゃくし

おたまじゃくしが、とりにくいのは、池の水が多いからだというS君のことばから、池の水のくみ出しが始まりました。熱心に皆が力を合わせたかいあって池はうんと浅くなりました。しかし池の水はすっかりにがり、おたまじゃくしの姿は見えません。モゴモゴのために姿を見失いました。

「水をゆらすな!!」

「そっとしておいたら見えてくる」

それは皆にも通じ、誰もが動くモゴモゴが次第に底に沈むのを見ました。少しずつ水が澄み、底の石も次第にはっきりしてきました。モゴモゴのこの動きは、子どもにも、私にも大へんな感動でした。

今まで、つかまるまいとあばれたり、深くもぐったり、石の下へ逃げたり必死にしていますが、それより、モゴモゴを使う方が、何より一番うまく逃がれることだということへみんなの子

どもが気づいてきました。

尻尾をふってモゴモゴを出そうとする子、あるいはモゴモゴになろうと、何人かが出てきました。それから、おたまじゃくしのどんなときに、モゴモゴは動いていくかというかわりあいを、遊んでいく中に、池の中で生活するおたまじゃくしの生きる知恵というものにまで、子どもは心に止めたようでした。

以上、おたまじゃくしの遊びの記録の一部ですが、これから絵で表現したり、みんなで思い思いのおたまじゃくしを作って壁面に大きな池を作って泳がせたりしました。

一学期の遊びは、教師としては綿密な計画をもっていて、それを先に出してまっでは子どもをお客さまにしています。

それより子どもの小さな興味とか発見を大事にひろげてやり、遊びの中で役立ててやることで、やろうとする意欲をもりたて本当に楽しい気持で遊ぶようになるのではないかと考えます。

(晋屋市立小椋幼稚園)

■新刊

一九六七年版

保育学年報

B5判256頁／定価2300円／日本保育学会編／フレーベル館発行

日本保育学会における研究発表および総合的文献目録を収め、幼児文化財、保育関係団体、保育者養成機関、保行政、保育および保育学の動向など内容も豊富。

世界にも余り類例を見ないものである。保育関係者にとって、必要不可欠の文献である。

山下俊郎

『基本的な生活態度の形成をめざす指導』の研究 (九)

教師とM児の態度変容を追って

仏性とよ子・服部 馨

稲岡 百合・谷川 敬



(四) 愛情と信頼で結ばれるようになった教師とM児

事例 (六月八日)

M 児	教師	教師の気持
(会集室へ入らずベンチに2人の女児とM児こしかけてい る)	(小声で) あんた ち、会集室でおはな しきこうね。(2人 の女児にいう)	・友だちといっしょ に入らせようと思っ たが、かえって友だ ちの勢いで入ったよ うになると思い、や めた。 ・ M児自身に働きか け、自分で動こうと し、会集室へ自分一 人でも入って行ける 気持をもたせたかつ た。
(2人の女児すぐ立 つて会集室へ入る。 M児ベンチに寝そべ って教師の顔を見て 笑っている)	Mちゃんもいこう ね。(といいながら 抱き上げ会集室へ入 る。だかれながらき やあきやあ笑う)	・廊下のベンチに寝

(3人で顔を見合 せ笑っている)	(さきに入った2人 の女児の傍へおろ す)	そべったとき言葉の 働きかけの弱さを感じ、思わず抱き上げ た。 ・抱き上げながらこ うすることがよいか 悪いかという結果よ りも教師としてこう しかできなかった。 M児のようすを他の 多くの子どもはどう 見ているだろう。 ・このようにしてM 児が気持よく会集室 へ入ってくればど いう教師の気持がつ よく働いた。
---------------------	-----------------------------	---

(考察)

- ・自分から動こう、自分から動けた、という喜びを味わわせれば何かそれが自信につながるような気持がする。
- ・M児をまじえ3人の女兒がいた。その中の2人を先に会集室へ行かせた。M児にしてみれば、友だちとはなされ、きつと教師をいじわるく思ったであろう。
- ・教師としては、M児との人間関係を深めるため、あらゆる機会をとらえて、M児の心に入りこみ、とけ合いたいと願っている気持が2人の女兒を先に行かせたのであろう。
- ・M児が寝そべったとき、直感的に教師はM児との気持のふれ合いを感じ、自然に手をさしのべ抱き上げたのである。抱き上げたときの教師の気持は、きゃあきゃあとうれしそうにはしゃぐM児の姿にふれ、こうしたことへの自信さえわいたのである。
- ・先刻いっしょにいた2人の女兒もM児といっしょにいたことは、何かふれ合っていたものがあつたからこそいたのであると思う。M児を2人から引きはなしたのではなく、ちゃんとお友だちとして、またいっしょにいてねといった願いをこめて、2人の女兒の横へおろしたのである。
- ・M児以外の子どもはどのように教師とM児との姿を見たかということは、このときには重大なことではなく、何かに抵抗を感じてスムーズに入ろうとしないM児が、抱いてもらい喜んで

持よきそうに入った、そのときに味わったM児と教師との人間的なふれ合いを大切にしていくべきではなからうか。
事例(九月三日)

M児	教師	教師の気持
<p>(リズム遊び、柿屋さん、を広い部屋でする。M児をまじえ、3人でジャンケンする。M児が勝ち、柿屋さんになる。</p> <p>(にこにこしながら大きく回って柿をうり歩く)</p> <p>(4個の中2個まで探す。教師の顔を見ながら歩く)</p> <p>わからへん(と大声で走って籠を教師の所へもってくる)</p>	<p>Mちゃん後2つ。わからなかつたら先生に籠かしてね。</p>	<p>・全園児のいる前へ出てくるか心配である。でもじつと見ていよう。</p> <p>・Mちゃん、よくこられたのねと大声でほめてやりたかった。</p> <p>・他の子どもと同じように、にこやかにふるまっているように何かしら気持のはればらしい思いがした。</p> <p>・どうしてあんな大きい声が出たのだろうか、柿屋さんになってまわつたことがうれしかったのだろうか。</p>

(考察)

・会集室へ入ることもためらわず、いつも皆から遠のいていたのに、珍しくリズム遊びの仲間入りをしているM児の所へも赤い柿が渡される。もらってくれるだろうか、といった教師の心配をよそに、さらりと受け取ってにこにこしている。会集室へ自分から入った今日のM児の気持は、はればれとしていたであらう。

・M児が全園児の前でジャンケンをしなくてはならなくなった。またここで教師の心配があった。出なければもう一人の子どもにもわるいように思えるし、M児自身が自分から動こうとするよい機会だけに教師の期待は大きかった。

・教師の期待を裏切らず全園児の前で大声でジャンケンをし、柿屋さんになって得意になって売り歩くM児を見てみると、最初から見守ってやり、直接教師が声をかけ、励まさなくても、教師の表情・感情の中にM児を見はなせない何かがあり、その何かとのM児のふれ合いにより、自由にふるまえたのではなからうか。

・もう一步のぞむならば、困った、いやだと思ったことを自分で教師に見守られながら乗り越えて欲しかった。M児以外の子どもであれば、当然のぞまれてよいことかもしれないが、現在のM児にはまだ立ち向かっていくだけの根性がなく、それをし

るにより、M児にむり強いをしているようにさえ思えたのである。

・柿屋をうまくやらせることにより、どのようにM児がその経験に立ち向かおうとしているか、その姿勢、その態度、かまえを大切に育てていつてやるべきではないだろうか。

・4個の中2個まで売り歩いた柿を探しあて、その後2個がわからなかったのか、ちょっと表情が変わった。このときにいやだなあ、困ったといった不快感を味わわせることはM児にとって、折角自分から自由にふるまえた、これからの自信につながるうとする芽がくじけそうに教師には感じられたので、籠をかえすようにいったのである。

今まで教師対M児、M児対A児と、M児の動く範囲はごく限られたものであった。しかし今日は、会集室で百人余りの真中に立ち、リズム遊びを積極的にしようとうごいているこのM児に対して、教師のほうがかえって不安となり、なんとか助けなければいけないのではないかと心配した。しかしM児は、教師のこの気持をよそにピアノにあわせて堂々とやっている。やっているからといって、M児があんなに自由にふるまっているのは、やはりやっているからといって心をはなせない。教師との心のつながりがあるからだろうか。ともか

く新しいことには全然立ち向かおうとしなかったM児が、教師との心のつながりをよりどころに、それに立ち向かっていこうとした尊い姿が見られた。

(六) 環境に適応できるようになった事例 (九月三日)

M 児	教師	教師の気持
<p>(A児、B児2人が遊んでいる)</p> <p>M児ついてくる) この人もまぜてな (とA) ええわ(とB)</p> <p>(病院ごっこの仲間入りして、患者になって注射してもらったり、おでこを冷したり、テレビ《子ども</p>	<p>AちゃんあそのベンチにMちゃん一人 でいるし、よんであげたら?</p>	<p>・ M児の遊んでいる ようすや場所が気になる。 ・ 誰かM児に気がつき誘ってくれたらと願う。 ・ 友だちにさそって もらった方が、教師 がさそってやるより 自然に遊ぶのではない だろうか。 ・ A児のやさしい心 根が、しみじみ素朴 な言葉のなかにかん じられる。 ・ 楽しんで遊べてよ</p>

ものつくったもの」
をかけて遊びだす)

かった。M児の気持
は、はれはれしてい
ることだろう。

(考察)

- ・ M児が笑顔で遊びに夢中になっていると、教師には安心感がわき、何ともいえぬ嬉しさがこみ上げてくる。このM児も今日一日有意義にすごせる確信といったものから安心感がわくのではなからうか。
- ・ A児が、ベンチに腰かけているM児に気づいてくれればとさりげなくいつてみる。教師がさそわず、友だちによって遊びに入っているように向けたと思った。
- ・ 五歳の子どもには自分のこと以外の友だちのことを思いやる段階に至っていないのかもしれないが、M児が自分から仲間入りしようとしてもできないが、この場合教師としては、仲間入りしようとしている気持を理解することが大切であると思った。
- しかし教師が誘って入れたのでは、受け入れ側の子どもが、いやでも先生がいわれるからしかたがない、という気持でM児を仲間入りさせたくない。そこで友だちにさそいにいかせ、仲間入りも子ども同士でしていくようにしようとした。
- ・ 友だちによばれてきたM児が、遊びの場を見ていやだと思っただけであつたなら、M児に対する教師の理解の仕方、ひいては、

事例（十月三日）

子ども全般の理解の仕方に、まちがいがあったのではないかと
いうことを、教師は心配せざるを得ない。

・子どもが今何を思い何を感じているかをキャッチする場合、五
歳児の尺度、年長児の尺度をもってはかるのではない。M児に
はM児のものさしでもって、はかりしる必要がある。教師
は一つ二つの尺度でなく37人の受持ちであるならば、37通り
の尺度をもっていなければならないと思われる。

M児の遊びが少しずつできかけてきた。しかし教師はその
遊んでいる所やその表情が気になるのである。ただ遊んでお
ればよいというのではない。友だちの中で友だちのいいなり
になり、遊んでもらっているのでは、教師の気持がおさまら
ない。そうしてどんなささいなことであっても、M児自身が
能動的になり、みづからたのしく、うれしいといった感情を
もつことのできる遊びであってほしいと思うのである。そこ
で教師は、A児をまじえてM児が自分をうちだせるような、
ふんいきへきそってやろうと努力した。この場合も、教師は
まげてあげてとはいわず、友だちの受け入れによってM児自
身に安心感をもって自然な形で行なわそうとしているのであ
る。この頃のM児は、友だちからも受け入れられるM児に成
長してきているといつてよい。

M 児	教師	教師の気持
<p>（保育室で人形遊び をしている。M児を まじえて6人の女 児、M児ごぎの上に 上がっているが不機 嫌そう）</p>	<p>Aちゃん、Mちゃん 何してはるの（と小 声できく）</p>	<p>・M児何もしゃべら ず、つまらなさそう な表情でいるので気 になる。 ・何か目的をもつて いるのかとA児にき いてみた。 ・M児にきいても答 てくれそうもない。 どうしたらいいだろ う、と迷った。 ・A児にきいたがは つきりしない。人形 ごっこグループの一 員として見ていな いので教師がきそ つてみる。</p>
<p>（教師の手をもち、 布切れ遊びの所をつ くる）</p>	<p>Mちゃん、布切れで 遊んではるし、見て きましようか。 （手をさしのべる） Mちゃん、ほーらお いすおくわね。</p>	<p>Mちゃん、美しい布 があったらお友だち にあげてね。</p>
<p>（だまつてうなず く）</p>	<p>Mちゃん、美しい布 があったら、友だち にあげてね。</p>	<p>・M児におしつけた のではないが、人形 ごっこの方がよかつ たのだろうかどと気 になる。 ・ここの場所の方が おちつけるのか、表</p>
<p>（美しいと思う布を 自分が布箱の中へ入 りこんで友だちにわ たしだす）</p>		

(考察)

・人形ごっこのグループに入っているが、友だちもM児に何かの役目を与えることもなく、自分勝手、勝手に遊んでいる。M児はその場にいるだけでそのグループにとけこんで遊んでいないのである。

・とげこめないまま、その場にいるだけではM児は可愛そうである。もっと楽しいふんいきの中で過ごさせたいと思う気持、なるべくなら人形ごっこのグループの中で過ごさせたいと、他の子どもにもM児の存在をきいてみたが、はっきり意識の中になららしい。

・自分から折角入ったグループで人形ごっこをしていたのを、教師が連れ出す形となったが、M児が布遊びをしている表情や、布を選んで友だちに与えているようにすを見てこの場合、連れ出した方が生き生き遊べたように思えた。

・遊びの仲間に入っておりさえすればよいだけではなく、その中

情がやわらいだように思える。先刻気にしたことは取越し苦労だった。
・やっと笑顔がみえ落着いて取り組んでくれてよかった。

でどのような位置をしめ、友だち同士互いに心のふれ合いをもつて、遊んでいるかを見極めることも大切な一つの教師の役目ではなからうか。形だけ友だちといつた過ごし方をしていては何日たっても、その子の成長はのぞめないのではないか。自分の思ったこと、感じたことが素直にだせるような、ふんいきの場においてやるのが大切ではなからうか。

この頃のM児は明るい表情で遊んでいる。しかしこのように遊んではいるが、何か無表情、無感動な表情が見られると教師はそれが気になり、なんとか明るい表情で遊びを楽しんでほしいと願うのである。そのためには、遊びをかえなければならぬ。ところで今日は教師が働きかけて、異なった遊びの場へさそい入れたのである。すぐにM児は異なった布遊びのグループへ何のためらいもなく入っていきけるようにまで成長してきている。しかもすぐ仲間入りして、布箱の中に入って美しい布切れを自分で選び、友だちに渡している。そこに自分の占めている位置、役目、といったものに満足し、活発に動いているM児の姿が見られたのである。同じM児がちがったグループに入り自分から活発に動けたことは、グループの子どもがM児に対しての受入れの姿勢があったと共に、M児自身が素直にそのグループと自然にとげこめるまでに成長してきた現われである。

(天津市立大津幼稚園)

第十七回 幼稚園教育実際指導研究会

主催

お茶の水女子大学文教育学部
附属幼稚園 幼児教育研究会

本年は、例年とは全く異なる様式で本研究会を行ないま

す。次のような日程で、本園の開園より帰宅までの教育の実際を公開します。

例年の実際指導研究会は、参加者があまりにも多数で限度を越えましたので、人数を制限しなければならなくなりました。そこで、本年のやり方に踏み切ったわけです。事情ご了承の上、ご協力願います。

日時 昭和四十三年六月三日(月)より六月八日(土)に

至る一週間

- 第一日 六月三日(月)
- 第二日 六月四日(火)
- 第三日 六月五日(水)
- 第四日 六月六日(木)
- 第五日 六月七日(金)
- 第六日 六月八日(土)

会場 お茶の水女子大学附属幼稚園
当日のスケジュール

9:00	各組実際指導
11:30	昼食
12:40	協議会
2:20	講演
2:30	
4:00	

講演(予定・敬称略)

お茶の水女子大学教官

松村康平・平井信義・津守 真・波多野完治

周郷 博・藤永 保・坂元彦太郎

実際指導

一日に行なう実際指導は、三歳児、四歳児、五歳児それぞれ二組、計六組が行ないます。

会員 会員はいずれか一日のみに参加するものとし、参加

人員を申込順により、一日二〇〇名に制限します。

会費 一日につき三〇〇円（研究会要項代を含む。当日お
払い下さる）

申込期限 四月二十日より五月十五日まで。但し、各日と
も定員二〇〇名になり次第メ切り、以後は、申し込みを
おことわりいたします。

申込方法

- | | |
|---|-----------|
| ① | 氏名 |
| ② | 勤務園名 |
| ③ | 勤務園所在地 |
| ④ | 参加希望の日 |
| | 第1希望 六月 日 |
| | 第2希望 |
| | 第3希望 |
| | 第4希望 |

[注] 復はがき裏にヨコガキで

の日をできるだけお書き下さい。

・「会員証」に記入してある参加日は、変更しないで下さ
い。

・復のはがきには、返信先のあて名をお書き下さい。

・復のはがきには、参加日、その他を記入し、当日印を捺
印した「会員証」をお送りいたします。

・研究会当日は、必ず会員証（復のはがき）と、会費を受
付に出し、研究会要項その他と、き章をうけて下さい。

・なお電話での申込みはおことわりいたします。

申込場所

東京都文京区大塚二の一

お茶の水女子大学附属幼稚園 幼児教育研究会

宿泊

ご希望の方は、五月二十日までに、左記つる家ホテル
へ、直接申込んで下さい。

つる家ホテル

東京都新宿区下宮比町十三（国電飯田橋駅東口）

電話〔二六〇〕三三三六・三三三七・三三三九

愛珠

想い出ずるままに (三)

中村道子



(三) 愛珠へ転任発令前後の心労

昭和十六年四月一日には、西六小学校も、入学式を行なった。

式後校長室の来客が、退出せられたときを見計らって、私は学校へ行った。新入児の保護者会開催の打ち合わせを園長としてから、会計事務の整理に係の先生としよう校長室を出たとき、電話のベルが鳴ったので、直ぐ側の受話器を私は取った。

「中村さんはおられますか」「私ですが」「ちょうどよかったです!!

ご苦勞ですが、明後日の午後一時半に泉布観^{せんぷくわん}へ来て下さい。間違はなく来て下さい」と切れた。「何だろう」、教育部に呼び出されるようなことはしていないが、何だろうかと思ひ、後の校長室の戸を開けて、「先生!! 教育部から電話で、明後日の午後一時半

に泉布観へ来るようにと聞いていますが」「何? 教育部からか?」「私は教育部から呼びつけられるようなことは、していないのに、不審ですわ」「そうか!! 転勤と違うか?」「来いというなら行かねばならぬ。とにかく行って来なさい。用事がすんだら直ぐここへ帰って来なさい」といわれて、不審を抱きながら幼稚園へ帰った。

退出時刻の四時も過ぎていたから、先生たちは皆帰宅して誰もおられなかった。一人ぼつねんと、腰をおろし、先刻の電話は何だろうと、また不審に思った。一人席に坐って、向こうの塗板を見詰めていたら、園長席の机の真上の天井から、ポタポタ水が落ちたので何かと見ていると、グツグツグツグツと量が増し、コップ一杯半はある、動物性のものの臭気があった。おばさんと呼んで、「何だろうか」と尋ねたら、「あっ!! 狸のと違いますか!」

「まだいるの!! 嫌やなァ、気味悪く一層嫌になり、「思っているも仕方がない、当たって砕けろだ」と小声でいって、帰り仕度をして門を出た。家では何もいわなかった。家人が不安を感じてはいけないと思い、両親が亡くなってからは、よけい外のことはおもしろいことのほかは、一切何もいわない、まして自分の勤めことは、善悪不問、話さないことにしていたから、今日もいつものように、笑いながらはいって行った。

四月三日は神武天皇祭で休園だから、午後幼稚園へ行った。明日の始業式には特別の用意はいらない。

幼稚園の向かいの家は、芸者の屋形で四人程置いていた。粹な構えで表の格子に浪華踊りと書いたポスターが、一枚下がっている。この通りの、すなわち砂場筋から裏通りを抜けて、気分を転換したいと、九軒の桜の通りへ出た。

三間道路に、二尺程の高さに切石を積み重ねて土堤を作り、それが桜の並木になって二丁程続き、木の下の方々にボンボリを建てて、一層情趣を添えている。花はまだ二分咲きであるが、枝にもボンボリが下がり、金紙の短冊が風にヒラヒラ回っている。小石を敷いた地面には、石の間から小草が生えていて美しい。

並木の中央辺りが、夕霧や伊左衛門が遊んだ、お茶屋の吉田屋の正門で、新町中で一番大きく、他のお茶屋と変わった構えで豪

壮であった。二十間たらずの間口は、二間の門を左右に挟んで、格子をはめた何かの部屋になっていて、浪華踊りのポスターが五、六枚下がっている。中に誰かがピアノで小唄を弾いているらしい。門の扉は左右に開かれ、大玄関の前の広い敷石がチラット見え、突き当たりの一間余りの勝手口には、ゴロゴロと鳴る障子戸が締められていた。この前庭には全部磨きをかけた石が敷き詰められ、鴻池の玄関よりなお広い。桜も満開になり、浪華踊りも月の中頃になったら、また見に来ようと思つて家路に着いた。

翌日は午前中に始業式をすませ、園長にも挨拶して、泉布観へ行った。会場には、ちょうど十分前だから、大分おおぜいの人が行って、六、七人女の人もいた。四、五人は見知りの人だったから、「これは何ですか? 悪いことと違いますか?」誰も何もいわない。西九條幼稚園の富園長の隣りが空いていたから、「掛けさせて貰いますわ」といって坐った。富先生は小さい声で、「今日ここで辞令が出るのですと、今朝新聞記者が来ていました。貴女は愛珠ですと」「そんなことがあるものですか、それは先生ですわ」「いいえ貴女が愛珠で、私は御津ですと、そんなことをいうてなざったから、間違いないと思います。張間さんは道仁、園城寺さんは栄、岡田さんは西九條ですと」そう聞けば一月の終わり頃、美術館の地下室に呼ばれ、督学課長、学務課長、体育課長、人事課長の各課長が並んでいる大きいテーブルの前に、私は

腰をかけ、次々に問われるままに返事したことを思い出していたら、富先生が、「美術館のことは、今日の考査でしてん」と、つけたして下さったから、「そうだったのか」と思い当たった。園長の発令とすると、私は西九條か、栄だろうが、栄は円城寺さんが園長であるなら結構ですといわれたことを、美術館でちょっと聞いたから、その方には懸念しなかった。何分事変最中のこととて、悪いことでなくてよかったと思つた。ちょうどそのとき司会の先生が現われ、続いて督学課長から、各校園長へ辞令の伝達があつて、思いがけなく、愛珠幼稚園保姆兼園長に任ずとの辞令を貰つた。そして誰はこの幼稚園だということもわかつた。私はこの荷は重過ぎると思ひながら、皆と別れた。

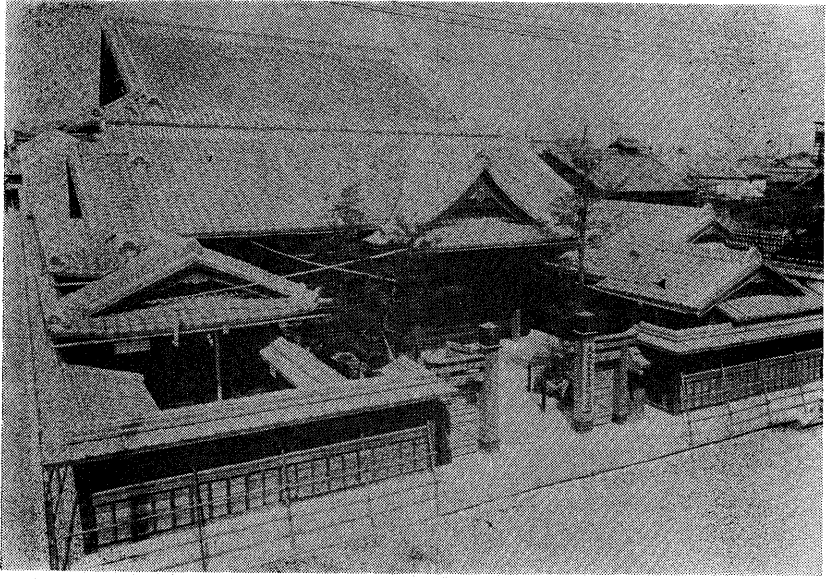
一昨日、用事がすめば、ここへ真直ぐ帰れといわれていたから、西六学校へ帰り、校長にこのことをいった。「ふうん!! 発令か!!」といいながら、辞令を受け取り、それを開けて見ながら「愛珠やがなア!!」、突然に大きな声で、隣の部屋の教頭に、「桜井君、中村さんは愛珠幼稚園へ転任や、よかつたなア!!」

「愛珠でしたか!! よかつたですなア!!」
二人は心から喜んで下さった。私は嫌ではなかつたが、手放して嬉しいとは思わなかつた。荷が重いと思つて、不安であつた。

「こうなつたら、この幼稚園の段取りを早く決め、先方の主任とも打ち合せて、赴任するまでに片付けて置かんと、手が回ら

んようになると困るで」と、注意して下さった。私が幼稚園へ帰り、皆にこのことをいうと、一同は口々におめでとうといひながら、そやけど私らは困つたなアと嘆息した。紙一枚で動かねばならぬ私らは、お互いに平素から腹を割って置きましょう、といった。以前は転動しても、大体行先がわかつていたから、不安はなかつたが、このたびは、大阪の中心地であり、経験のなかつた環境であつたから、不安で仕方がなく、明日の入園式の通知は、以前からしてあつたから、皆で帰ることとして幼稚園を出た。私が宅へ着くと、妹は待つていたといわぬばかりに、玄関まで来て、「姉さん!! よかつたなア、愛珠やそうで!!」「どうして知つてゐるの」「原谷先生が電報を下さつたので知つたので、それこの通り」と、電報を仏壇から持つて来た。見れば、愛珠へ栄転おめでとくと、書いてある。「まア原谷先生は、どうして早よう知りはつたんやろう」驚いているとき、夕刊が来て、移動の記事を載せていた。

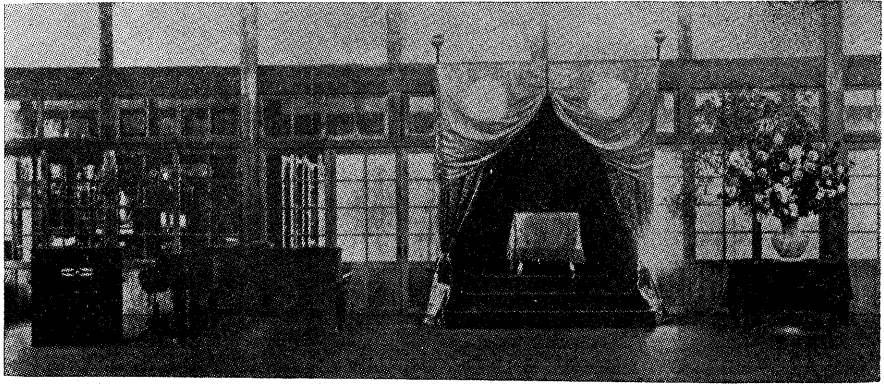
翌日幼稚園へ行くと、八時半にはもう二年保育組が大分来ていて、新任の荒木先生と遊んでいた。「大きい組になっておめでとう」といったら、どの子も嬉しそうに笑っている。そろそろ登園して来る新入児も保護者連れで、それぞれ受け付けて貰つて各室にはいり、十時の合図で担任に引卒せられて遊戯室に集まり、嬉しそうに並んだ。そして型の通り入園式が終わつたのである。



明治34年3月 園舎竣工当時の全景

この日午後愛珠園から、電話があつて、十日がここの入園式故、それに間に合わせて来てほしいことと、それまでの用事はしているが、その間の煩わしいことについては、指示してほしいと依頼して来た。私は愛珠へ行くのは嫌であつた。

発令以来今日まで、そここの親しい友だちや、知人から交々受けた挨拶は、喜び、同情、激励などで、それを総合すると次の言葉にしばられた。学校区内は、非常にむずかしく、なかなか骨が折れること、母の会と後援会が対立して、母の会の幹事の中には、市会議員の夫人がいて、主人から役所の理事に話して貰つたり、阪大の教授の夫人や、要路の人々と親しい知己を持つ者、それにそれらのとりまき連もいて、こうした人たちが、従来の後援会の会長や、副会長に対立し、今期退職した園長がこの母の会を作り、将来は母の会一本にして、全部後援を依頼する意向らしいこと、後援会長は、現在弁護士であるが、元はそうそうたる代議士で、副会長は東区議員をしていて、会長が忙しいものだから、後援事務はほとんどこの人に依頼していることを聞くと共に、この中間の人たちもいて、じつとこの姿を見ているようで、区内には意見の渦ができているらしかった。このため、教育部でも少なからず気をつかって、次の園長には、政治性のない人に来てもらうといっているという、噂も聞いた。



園舎竣成と同時にできた組立式奉安所 中久留文部技師案

私の荷物といって
も、何もなかった。

公文書は永年の物
や、保存期間のある
ものは、それぞれ区
別して綴じていたか
ら、もうできたも同
然で、次席の人にこ
とづければよいだけ
で、やっと決心が着
いたから、放課後こ
の職員室で、朝夕を
共にした可愛いこれ
らの人々と、心の碎
けたお判れ会をした
のである。発測とし
た若いこの人たち
は、やがて元気にそ
れぞれ保育界に羽ば
たくことだろう。

私は園長に、明日

園児一同に挨拶して、九時に出発することを電話した。そのとき
園長は、「愛珠まで自分は送る」といって下さったのである。これ
と共に愛珠へも電話をしたら、「当方は母の会の幹事が三人迎え
に行きます」といって来たから、驚いて、また園長に電話する
と、「えらいことや、それなら西六も婦人会の人を呼んで、愛珠
まで送って貰おう、よし!!」と切れた。

今日は四月八日、いよいよ愛珠へ赴任の日である。私は絞りの
付いた羽織を着て、西六幼稚園への最後の出勤をした。子どもら
は八時頃には、大方登園していた。愛珠から電話があつて、今日
自動車で幹事が三人お迎えに出ますといつて来たので、園長に電話
すると共に子どもを遊戯室に集めた。そして、今日の集まりの意
味を子どもらに話したら、一年保育児は「ふうん!! そんなら直
ぐ帰って来てちょうだいや」「もう西六へ帰れへんのん?」「ふう
ん!!」「なんや!!」「そやけどまた帰って来てちょうだいや!!」と、
口々にいった。黙っている子どももいた。

車は着いたらしい。私が子どもらと話している間、西六婦人会
の人たちは、それぞれ紋付を着て、五、六人が応接室で、愛珠の
人たちと挨拶をし、園長が中心になっての交歓のようすだった。
私も保母さんたちや、小使さんらに、後を頼んで応接室へはい
り、始めての挨拶をした。

その間に幼児らは、廊下や門内に出て来て、私らの出るのを待



私の赴任当時車寄側にあった桜

つ有様だったから、園長にこのことを話し、いよいよ出発することとした。そして一同にさよならさよなら、といいながら手を振って、おとも子どもも笑いながら、別れた。私は愛珠の幹事方と、同じ車に乗ったが、私の胸の中には、退職届を入れることを忘れなかった。池田さんや、砂原さんは、園長と同じ後の車に乗って、私を送って下さった。車は愛珠の門前に止まった。門から

車寄まで、石畳を前にして、両側に婦人会の人たちや、保護者の一部の人たちが並び、その前に幼児が一列に整列していたので、私は門に一步はいり、一礼して、それから微笑みながら、子どもの間を足速に玄関に昇り、招ぜられるままに、応接室にはいった。西六

の半分位の広さで、別の人たちがいたので、一人一人に挨拶し、今西園長や西六の人たちも来て、皆で交歓した。お茶とお菓子をいただき、暫くしてから、今西園長は市役所へ行くといわれ、他の人たちも家路につかれた。

大谷さんもほっとしたらしく、「ここが先生の席です」といって、次の園長室の机を指した。その机は総桐であるが、年を大分経た、代々の園長用であるらしかった。窓越しに蘇鉄の樹の影が見えるから、立って窓辺に出ると、先程通った、門や、車寄せまで作られた清麗な石畳が見え、そのとき気の付かなかった、桜が枝を張って、花をたくさんつけている、満開には少し早いですが、咲けば美しかろう。

翌日は愛珠の入園式で、始めて幼児や保護者の人たちと逢ったが、子どもはどことも同じで皆可愛らしかった。この日式後、東区役所や愛日小学校、ならびに教育関係の役員方の家へ挨拶に行つたが、いずれも職業に応じて、構えは異なっていたが、堂々たるもので、どうしてもこの中を歩まねばならぬと覚悟をした。これらの中には、直接主人が来て下さった人あり、執事といわれている人、昔ながらの番頭や、女中頭などが応対に出られた。大阪市の経済の三分の一は、この東区で持っている、何かのときに、前園長がいつておられたことを思い出した。

私は来る十五日に予定されている、後援会と母の会の連合歓迎

憂珠

額の室の接応

会に、続いて行なわれる本年度の、会則審議と、事業の予定協議について考えると共に、いかに運ぶべきかと思つた。無難であれかすと祈らずにはいられた。長田さんについては、今日まで来られない。

以前から作られている後援会の中に、給食事業として母の会の活動を入れれば、合体するのだがなア——。幼稚園としては各部門から、いろいろな形で後援していただければ助かるのに、二つが対立するとは困ったこと

だ、仕事の上では甲乙はなく、大切な必要なものであるのに——。十五日が来て、予定の午後、両会の幹事が十四、五人集まり、私の着任を心から喜んで下さった。長田さんとははじめて逢つて挨拶した。一同は鶴屋八幡のお菓子でお茶をいただいたが、鶴屋八幡は今中さんといって、ご主人は元後援会の会計をして下さっていたというが、今日奥さんは、母の会の幹事として、出席せられていた。歓迎会も終わって、次の課題に移った。

私は笑いながら、「幼稚園の後援は、皆さまにお世話になることですから、新年度でもあり、子どもさんを中心とした原案を作って、謄写してお目につけて、十分にご審議を願つた上で、決定致したいと存じまして書いておりましたが、毎日雑用に追われ通しで、もう少し未だできていませぬので申訳ありませんがもう一度ご案内を致しますから、ご厄介でしようがもう一度お出かけいただきたいと存じます。申訳ありませんがお願い致します」といった。この日の行事はこれで終わり、一同は各自散会することとした。私が園長室に帰つたとき、主席保母が来て、「もうすみましたかと、案じる気配だったが、私が笑っていたから、安心したように職員室へ帰つた。

一人になった私は、座席についてから、誰にいうとなく一人語り一人聞いて、会得するように頷づいていた。幼稚園の後援は、保護者各自がして下さるので、会がするのではない、ますますそれが糾合されて会と名づけられたもので、同じ性格の会が幼稚園を援助するのに、対抗的にせず、不即不離で、仕事は分担して、一本になり、あたかも一輪の花になってほしい。この願いを中心として、従前の会則を見ながら鉛筆を走らせ、母の会には会則の書物はなかったので、大意を共に織り込んで原案を仕上げ、印刷して、五月二十四日午後一時に再び臺の部屋で理事会を開くことを通知した。

二十四日が到来し、内藤後援会長をはじめ、副会長や、母の会側も、それぞれ来られたから、一時半に始めた。私は前回の延期を詫び、印刷物はあらかじめ配布して、目を通して貰っていたから、直ちに審議にはいった。

「この印刷物を見せていただきますと、これでは母の会はもう無いことになりましたなア」随分お世話をしましたが、それらは皆無駄だったようで、母の会を認めていらっやいませぬね」「いいえ、母の会が、いろいろお世話下さったことは、十分に感謝しているのです、今後も大いにしていただきたいのです。女の手のいるときには、ご婦人方の手をお借りし、仕事の状態によっては男の方の手を煩わして、ご援助を願います。渾然一体となって後援を願いたいのです。ここで後援会と申しましても、従前の会の再現ではなく、全然違います。会名を変えるなら、本日変えても結構だと思います」「この会則は後援会のことばかりで、全く母の会をお認めになっていませんね」「大いに認識して、感謝しているのです。私は給食を主体にしません。全部を包含していますから——、一本にしたから、母の会単独のものと違います。事業の中では給食をうたっております」「全然母の会を認めていない」「後援会としたから、従来のもと同じに考えられていると思いますが、何でしたら会名のご協議を今日致しなくても結構ですが——」「何とおっしゃっても、母の会を認めていられません」一

瞬皆黙った。私はちょっと黙って、きっとしていった。

「何時までここにいるかわかりませんが、私のいる限り、この会則で園を後援していただきたいと存じます」ちょうどこのとき、緊急電話が来たので、私は電話室に行った。用事をすませ、遊戯室を通り抜けた処で、母の会の役員が一団となって会場から出て来られたので、「どうされましたか、お茶を入れておりますから」といったが、「皆はこれで、おいとまします」と一人がいつて、他は皆、黙って門の方へ歩を進める。私は「そうですか」といつて、見送ろうと後に続いたが、別れるとき、「ご苦勞さまでした。さようなら——」といつた。

会場へ帰ったとき、内藤先生と長田さんが、二人だけおられた。「他の方はどうされましたか」とたずねると、「帰りました」「そうですか、先程も申したように、この会則で、なにとぞ幼稚園の後援をお願いします」といつたとき、内藤先生は、黙って頷づかれ、長田さんは、「私は喫驚した!!あんたは、思い切ったことをいうなアと思った」といわれた。私は繰り返して、この会則で後援を、お願いしたいといつた。

次いで総会の日、選挙の結果、会長は内藤先生に、副会長は長田さんに、会計には西田さんに、各々依頼して、保護者への通信連絡には、総て幼稚園名を用い、会名は一切使わなかった。

五歳児の記録⑪

十月四日 土曜日 晴

遊戯室で音楽リズム
運動会の練習

明日の運動会に関するいろいろな注意事項



二学期

磯部景子

十時四十五分

遊戯室で自由表現の遊戯やスキップをする。

子どもたちはのびのびと活動する。

十時四十五分～十時五十分

運動会の隊列の組み方(二列↓四列↓一列)を練習する。

十時五十分～十一時十五分

海の組(五歳児)といっしょに入場、行進、ラジオ体操第二を練習する。

十一時十五分～三十分

保育室に帰って先生が明日の運動会の注意事項を話す。

十一時三十分

帰園

十一時十五分

運動会の練習を終わって保育室に帰る。

「手ぬぐいを持って帰りましょう」といいながら、先生は子ども

もたちがぬいだカーディガンを各自にわたす。

子どもたちは帰り仕度をして、いすにすわる。

先生は黒板に明日の運動会の出場種目をかく。

かいかいしき

つなひき

リレー

ゆうぎ

先生「さあ、これだけみんなあしたするのよ。ゆうぎの中にはタン

プリンにするのや、きゅうびいさんや、動物のが入っているのよ。開会式はこれから始まりますよっていう式だからみんなであるの。つなひきはこのあいだ勝ったから今度もきつと勝つだろうなんて思わないで、いっしょうけんめいするのよ。Mちゃん、Aちゃんきこえたかしら」

MとAが話しているので先生は注意する。

「それからね、あしたお天気だったら、またいつもよりはやいのよ。八時四十分までに幼稚園にくるの」といって、黒板に8じ40ぶんと書く。

「おくないでいらっしやいね。このあいだは少しおくれた方がいらしたけれど、あしたは本当の運動会で、始まってならんじゃったら入れていただけなのよ」

Mが指をなめている。

「Mちゃん、あなた、時々まだおてを口を持っていくけど、もうおかしいわ。もうそんなことはやめましょうね」

◎がとなりの子どもとしゃべる。

「◎ちゃん、きこえる？」と注意する。

「あしたはね、エプロンはしてこなくてもいいわ。でもハンカチだけはつけていらっしやいね。そう、お母さんにいってね。

◎ちゃん、お話ししないで書いていらっしやい。それからあしたはおうちのお父さんやお母さんや、それからしんせきの方やおじいさんやおばあさんも運動会だから見にいらっしやるかもしれないわね。それでね、もしそういう方が、ちよつといらっしやい、とか、写真をとってあげますよっておっしやったら、み

んなはどうする？まだ幼稚園の遊戯やなにかがみんなすまないときによ。そうね、そういうときは幼稚園のが全部すんでからにするのね。それから、知らない人がちよつとこっちにいらっしやいなんていわれたとき、もう、みんなわかるわね、知らない人にはついて行かないのね。ええと、それから、あ、そうそう、皆さんは、リレーをするんだけど、小さい組の方はリレーのかわりにおみやげを拾って走るかけっこをするの。だけどみんなにもちゃんとおみやげはあげますから大丈夫よ。みんなには、幼稚園に帰ってからあげますね。でも、何のおみやげかは今日はまだいえないわ。とつてもいいものなのよ。じゃあ、今日はうちに帰ったら、あした元気に走ったり、つなひきをしたりできるようにゆっくりおやすみしてね。それからあしたの朝、『ああ、今日は運動会でうれしいな！』なんてあんまり嬉しすぎて、朝のお食事をいただかないできたりすると、幼稚園に來てからおなかですきすぎて走れなくなったり、気持がわるくなったりするから、それも気をつけましょうね。じゃ、あしたの注意はそれくらいだわ。それから今日は手紙をひとつ持って帰ってちょうだいね」

十月七日 火曜日 晴

運動会の絵をかく

ぎんなんをあつめる

八時四十分

先生は大きい画用紙を準備している。

F 「せんせい、外に行ってもいい？」

先生 「ええ、いいわよ」

男児五名が話しながら、画帳に絵をかいている。

E 「せんせい、こんな、大きい？」 といって、大きい画用紙をみておどろく。

先生 「そうよ、こんなに大きいよ。運動会の絵、おもしろかったところをかきましようね」

E 「みんなかくの？」

先生 「そうね、みんなかきましようよ。自分の好きなときね。リレ—でも何でも」

E 「かみ、もろうよ。えんや、こーら。一枚もらったよ」

E は紙を頭にのせて、男児が絵をかいているところに行つて机に向かつてすわる。

先生は画帳に絵をかいている子どもたちに、

「みんな、今日、いいときに、この大きな紙に運動会の絵をかきましようね」という。

C がすでに運動会の絵をかき始めている。

先生はC がかいているのをみて、

「あら、C ちゃんも、もうひとりでできたのね。いいわね」とわらいながらいう。

D が E のところにきて、E の机によりかかつて話している。D はまだ絵をかいていない。

D 「なに、かくんだって？」

E 「うんどうかいの絵。みんなかかきや、いけないんだって」

D 「この人間、どうなるの？」

E 「あるよ、これ、今ぬりますよ」

D は E がかいている人間とつのおの名前をむすびつけて、

D 「鉄の人間だったら、鉄かぶとかぶれば、いいじゃないか」

A も話に加わる。A もまだ絵をかいていない。

A 「あつ、鉄かぶとかぶったって何にもならないじゃないか」

E 「いっとくけどね、鉄はかたいんだよ。かたい人間なんだよ」

A と D はしばらく話に夢中になっていたが、やがて、クレヨンと紙を持ってきて、絵をかき始める。

K が自分のひき出しからクレヨンを持ってくる。

K 「この場所、とつておいてね。旗をかくんだから。ほりあいせんせい、旗の本は？」

先生 「あそこにはつてある旗をみてね」という。

先生は、先生のまわりで運動会の絵をかいている子どもたちと話している。

⑯ がくる。

⑰ 「おとうばんなの」

先生 「おとうばん？」

先生は当番のリボンを持ってきて、

先生 「つけてね」といいながら、⑱ にわたす。

⑩「せんせい、わたし、ゆうぎしに行っているから、おあつまりのとき、よんでね」

先生「はい、はい。⑪ちゃん、ひとりで行くの？」

⑪「⑫ちゃんと⑬ちゃんと⑭ちゃんと」

先生「そう、じゃあ、行っていらっしやい。よんであげるわね」

⑫「せんせい、わたしたち、人形の家に行ってくるの」

先生「そう？」

⑬「およばれに行くの」

先生「そう、いいわね」

⑭「たちは子どもの家へ行く。」

九時三十分

Kは運動会の絵をかいている。

K「せんせい、できた」といって、Kは人が走っている絵をかいて、先生のところへ持って行く。

先生「あら、いいわね、走っているの？ここに、みている人がいるでしょう。たくさんかくといいじゃない？お顔だけでも」

Kは先生から絵をうけて、机にもどってかきつづける。

まもなくKは先生のところへ絵を持って行く。

K「せんせい、かいたよ」という。Kはたくさん丸をかいて、その中に目、鼻、口をかいている。

先生はKの絵をみながら、

先生「頭、かかなくちゃ」

K「かいたよ。これ」

先生「あら、毛がないじゃない？」

K「あっ、そうだ、毛なしぼうずだ。毛、毛、毛、毛」といって、机にもどって、絵をかきつづける。

九時四十分

保育室

男児五名絵をかいている。

⑮が黒板に絵をかいている。

庭

男児三名、砂場で遊んでいる。

⑯が砂場で遊び始める。

子どもの家

遊戯室

おおぜいの子どもが遊んでいる。

⑰は運動会の絵をかくつもりで、先生のところに画用紙をとりに行く。

先生「何でもいいわ。ていねいにかいてね」という。

先生は運動会の絵をかくことを前提にして、何をかいてもいいという。

⑱「運動会の絵じゃないものでもいい？」という。

先生「いいえ、運動会の絵なら、何でもいいの。人がいっぱいいた

でしょう？そういうのかいても、おもしろいわね」という。

先生「いいえ、運動会の絵なら、何でもいいの。人がいっぱいいた

でしょう？そういうのかいても、おもしろいわね」という。

先生「いいえ、運動会の絵なら、何でもいいの。人がいっぱいいた

でしょう？そういうのかいても、おもしろいわね」という。

九時五十分

先生は庭に出て、砂場で遊んでいる子どもたちの腕をまくってあげる。

◎と①がふたりで遊んでいるのをみて、

先生「◎ちゃんも、①ちゃんも、ここで遊んでいるのね。あのね、

あした遠足だから、今日中に運動会の絵を一枚かいてね」という。

保育室では◎がひとりで運動会の絵をかいている。先生は◎がひとりで絵をかいているのをみて、

「ひとりじゃ、大変だわ、あとだれ？呼んできてあげるわ。①ちゃんと②ちゃんと③ちゃんと」といって、遊戯室に呼びに行く。

十時十五分

十九名の子どもたちが運動会の絵をかいている。

子どもたちは絵をかいては次々と先生のところへ行く。

先生は子どもたちの持ってきた絵をみながら、子どもたちと話す。

先生はできあがった絵を保育室の壁にはっていく。

先生は◎がかいている絵をみて、

先生「◎ちゃんが幼稚園にきて一番いい絵ね。ていねいにきれいにかいたわね。とてもいいわ」という。

「Aちゃんもお顔があっていいわね」という。

十時二十五分

EやDは歌をうたいながらかいている。歌をうたいおわると、

「び、ん、ぼ、う、だ、い、じ、ん、だ、い、だ、い、じ、ん」といって字数をかぞえる。

先生はEたちをみて、

「Fちゃんをごらんなきい。だまって、いっしょうけんめいかいているわよ」という。

④が庭から入ってくる。

④「せんせい、ピアノをひいてもいい？」という。

先生「ピアノはおべんとうをいただいてからね」という。

電話がかかってきて、先生は職員室に行く。

十時三十五分

川の組の子どもがきて、

「山の上に、こんな大きな蚊がいたよ」という。

Eは絵をかきながら、

E「みはりばんしてて、いま、いくから」

H「ぼく、いってこよう」といって絵をかくのをやめて、庭に出る。

先生は川の組の子どもと話す。

先生「そう、大きいのがいたの？死んでるの？まあ」といって、川

の組の子どもの話をきいている。

川の組の㊦が九時半頃より時々きては、Tを待っている。

㊦「はやくしてよ、Tちゃん」という。

B「遊んできていい？」

先生「もう、おしまいした？おしまいしてからね。㊦ちゃん、今日は何で、えらいんでしょう。もう、これでおしまいかとおもったら、みている人までかいたのね、えらいわねえ」という。

十時五十五分

Tはやつと運動会の絵をかき終わって、㊦をさがしに行く。

T「もう、いないかな」といって庭に出る。

絵をかき終わって遊び始める子どもたちが多くなる。

男児が先生のところへ飛行機にする紙をもらいに行く。

先生は紙を出して、紙を切りながら、

「ここに切っておきますからね。やぶれたらかみくず入れに入れて下さいね」という。

Nがナイロンの袋にぎんなんをとってきて先生にみせる。

(少し前にナイロンの袋をちょうだいといって、袋をもらって庭に出た) 先生「ぎんなん、何でとったの？手で？はやく石けんでおあらいな

さい。しるがつくと、お顔がこんなになっちゃうのよ。ぎんなんどるときは、お箸か、木の枝でとるのよ」

Nはおどろいて、手洗い場に走って行き、しんけんを手を洗う。

㊦「ぎんなん、とってくる、㊦ちゃんと」

先生「そう、お箸でとるのよ」といって、箸とナイロンの袋をわたす。

十一時五分

先生は紙飛行機にする紙を切っている。

㊦が運動会の絵をかいているのをみながら、

先生「おもしろいわね。㊦ちゃんのおもしろいのができそうね」という。

C「聖火リレーするもの、この指とまれ」といっている。

C「せんせい、入って」

先生「どこでやるの？」

C「お外」

先生「Kちゃんも入ったの？」

先生は聖火のトーチを持って来る。

「Cちゃん、ここに聖火をおいとくから、人があつまったら、教えてちょうだい」といって聖火をおく。

(同じような光景が二十九日にもみられた)

(お茶の水女子大学)

運動会についての問題点

堀合文子・磯部景子

二期期になってからの記録のうち運動会とオリンピックと動物園に入る前までを整理しているうちにいろいろと問題が出てきましたので、その間のことを堀合先生にお話ししていただきました。

まず運動会に関する部分では、次のような疑問が出てきました。

運動会の練習をする期間は、ある時間になると、毎日全員集まって運動会の練習が始まること。

クラス中の子どもあるいは幼稚園全体の子どもがいっしょに行動するためには、普段ならしてもいいこと、たとえば子ども同士話ししながら何かしたり、体を動かしながら何かすることなどができなくなり、子どもたちはたくさんの制限をうけること。

リレーをするときは三列、遊戯をするときは二列、音楽行進をするときは四列に隊列をくむこと。はじめ先生が子どもたちの手をとってひとりひとりの子どもを指導されると、二回か三回目には子どもたちはできるように

なるが、隊列をくむことが必要かどうかということと、隊列をくむことに関連して縦横をきれいに並ぶということ。

遊戯の内容について、運動会では三歳児から五歳児までの子どもが同じ遊戯をしているが、普段の音楽リズムのときは子どもたちは、ひとりひとり自分で考えて表現していること。

運動会がおわって運動会の絵をかくこと。これらに関して、堀合先生におたずねしました。

運動会はどういう内容をどういうやり方で行なったらよいのだろうか。

磯部「二期期は九月十四日からの記録があります。運動会は十月四日でしたが、運動会までの約二十日間の記録をみますと、^(注1)

九時半か十時頃からみんなが集まって運動会の練習をしていますね」

堀合「時間がたいていきまっています、子どもたちは集められるわけです。だから子どもたちは何をしていても自分たちの楽し

みを途中で切られてしまいます。そうして約一時間くらいみんなで遊戯をします。五歳児のクラスになると、その他につなひきをしたり、かけっこの練習をして、ほとんど午前中を運動会の練習で過ごします。運動会が終わるまで毎日そういう生活が繰り返されます。ですから子どもたちが自由に遊ぶのは午後くらいです。三歳や四歳児のクラスのとくにあまり問題に感じないのは、遊戯をするとは遊べるし、午後だけ練習しても間に合いますが五歳児になると種目が多いのです」

磯部 「リレーをするときは三列、遊戯をするときは二列、音楽行進をするときは四列に隊列をくむ(注2)ということと、それに関連して縦横を基盤の目のように並ぶということとは普段の体操のときでしたらその必要がないわけですね。運動会だからきちんとしなければならぬのですか」

堀合 「たとえば運動会でリレー(注3)をする場合、縦も横もおらないと組がわからなくな

ります。普段子どもたちが庭でしているリレー(注4)だといつ始まったのか、いつ終わったのか、しょっちゅう繰り返して走っています。距離にしても、繰り返して走っているうちに縮まってきます。すると出発点が変わったりします。ところが運動会だとそういうわけにいかないですね。運動会という枠があってその中に入れようとするから問題が出てきます。あの年齢の子どもには縦横にすじをつけて並ぶということは必要を感じないでしょう。おとなの必要でもってしているのです。指導のあり方からいえば、五歳の子どもも、また、小学校の一年生や二年生の子どももそうですが、自分でやりなさいというだけではできなくて、三歳の子どもを指導するのと同じように手をかけて、子どもたちが納得できるように指導すれば、子どもたちは少しずつ、高度なことがらを習得します」

磯部 「普段、子どもたちがリレーをしているときは、今先生がおっしゃったようなり

レーですが、それで子どもたちはみんな不思議にも思わないで、お互いに、いろいろと相談して真剣に取り組んでいますね」

堀合 「そうです。しかし、リレーを例にする子どもたちが普段リレーをしているものを考えると、それは、やはり運動会からきています。大きい組の人が運動会でリレーをする。そして運動会が終わっても普段でもしている。それを小さい組の人がみて小さい組の人もリレーをするというように、リレーの、そのもとをさかのぼれば、おとなが与えています。そこで計画ということが出てきて、そこに、いろいろと問題があります。リレー自体がいけないのではなくて、運動会という枠に入れようとするときに問題が出てきます」

磯部 「リレーにはスポーツとしてのルールがあります。幼稚園の運動会でする場合に、普段活動していることがらを考え合わせて、どういう形で行なったらいいか

を考えることが大切ですね。一律のルールでするところに問題が出てきますね」

磯部 「遊戯の内容について、普段保育室で子どもたちがレコードをかけて、いろいろと表現しているときや、遊戯室で音楽リズムの時に表現しているときは、子どもたちは、ひとりひとり、自分で考えて表現していますが、運動会の遊戯の場合は

「きゅうびいさんの遊戯」をするとか「動物の行進」をして、みんなで同じ型をおぼえるのですね」

堀合 「運動会の遊戯をするところの記録をみますと、最初、私がずいぶんあせています。大きい組だから時間をかけてしくてもおぼえられるということ、みんなでしなければならぬということやこういうことを教えるのは心の底では疑問に思っているということ、このふたつのことから短期間でやっつけてしまおうという気持ちがあったことを思い出しました。しかし、実際にやってみると、こちらの計画どおり、短期間にさっととはいかなく

て、こちらのあせりがでてきます。子どもたちは入園当初からいろいろと考えて表現していますので、運動会の遊戯のときでも、先生が何かいえば子どもたちは考えようとしています。たとえば「馬になりましょう」というと、子どもたちは馬を自由に表現しようとしています。しかし、運動会の遊戯の馬はあらかじめきまっているわけですから、子どもの活動をとりあげると、こちらの計画がつぶれます。計画をすすめれば子どもたちの創造性をつぶしてしまいます。苦しいですね。実際にやり始めるまでは、こちらは運動会だからという意識があります。しかしやり始めて子どもたちの反応をみると、ああ、やっぱりだめだったなと思います。運動会をしなければならぬという意識を強く持っていて子どもたちの反応をみると、こういうやり方ではどうかと思います」

磯部 「普段、新しい歌はどういうふう^(注7)に指導されるのですか。運動会の場合は、新し

い歌は先生が黒板に歌詞を書いて、先生はうたいながらピアノをひいて、子どもたちといっしょにうたうという形で入っていらっしやいましたか」

堀合 「歌の指導はこの年齢の人にとってはむずかしいのです。幼稚園では自分の知っている歌を音程に合わせて声を出して楽しくうたうという、楽しくの方が大切ですね。いい声を出して、みんないっしょにうたうということは、幼稚園ではそれほど要求しないのです。だからテレビのコマーシャルでも内容が非常にわるいというものでなければ、こちらもいっしょになつてうたいます。子どもの発達状態からみると、じっとしてうたうよりも体を動かしてうたった方がよい年齢ですから、動きをたくさんして歌はつけたしくらいに考えていいでしょう。子どもたちの中から歌が出てくれば、なおいいのです。歌の指導はほとんどうごき^(注8)が全部で、うごきを主体にして、それから自然にうたをおぼえるということになりま

す。歌を指導するとき新しい歌をばっと出すということはありません。遊戯室で音楽リズムをするときに曲をきかせておくとか、普段子どもたちが遊んでいるときに、機会をとらえて先生がうたってみるとか、そういうことが何日間かあつて、音楽がわかつて、それから歌に入りますね。だから運動会のとくのように歌詞を黒板にかいたり、口づたえで教えるものではないのです。それを運動会の場合、短期間養成をしたわけです。五歳のあの時期で字も読めるということで、こなしでもらえるだろうという意図が少しあつて黒板に歌詞を書いたのですが、いくら字が読めるとしてもいい方法ではありません。さきほど歌の指導ということをお話ししましたが、実際には歌をほとんど教えていません。だからといって、うたっていないわけではないのです」

磯部 「運動会の枠のことで、普段幼稚園でやっていらっしゃると同じようなやり方で運動会をすることはできないので

すか」

堀合 「できるんですよ。普段子どもたちが自由に表現していることを運動会でするのが理想だと思います。ところが運動会はやっている自分も楽しむし、まわりからもみてもらうという両方の条件があります。みてもらうということが濃厚にためがきれいということが加わってきます。みためがきれいということが濃厚にでて、普段するのところが形をつくってやるわけです。普段やっているのをそのまま運動会ですると、みている人からわからないわけです。それで普段と同じようにするときには、相当解説をつけます」

磯部 「運動会の大きさについてはどうですか」

堀合 「幼稚園だけとする運動会(注)と小学校といっしょにする運動会があります。幼稚園だけでする場合は普段していることをいえます。小学校といっしょにする場合は小学校のプログラムのひとつになりま

すね。初めのうちは普段していることをしたこともありますが、しかしみればえがしいというようなことから、みんながそろって同じことをすることになったのです」

磯部 「運動会を現在行なわれている形でしなればならないのでしょうか」

堀合 「現在行なわれているようにすることは疑問に思います。運動会だけではなくて、行事というものを大きくみる必要があるかどうかということが問題ですね。運動会ということになると日本の学校制度の上に立つて考えなくてはならないわけです。学校でしたら日常行なわれている体育面を披露することから始まったのでしょね。それがだんだんとみせる要素が多くなったのでしょか。幼稚園の場合は体育面はないわけです。そうすると遊戯をしてみせたり、かけっこをしてみせたり、かけっこをしてみせたりして

いるのです。内容を考えなければいけませんね」

磯部 「運動会で何をするかということがきまるのはいつごろですか」

堀合 「九月になってからです」

磯部 「それではきまつてからすぐに練習が始まるのですか」

堀合 「そうです。きまらないと、この活動がでてこないですね」

磯部 「九月三十日に空箱などの紙の材料が保育室においてありました。そして子どもたちが紙の材料で家のセツト(注9)をつくっていました。こうした活動は九月になってからあまりみられませんでした。紙の材料は次の計画のために出されたのですか。子どもの活動状況から必要になって出されたのですか」

堀合 「その頃になると運動会ですることができてきて、普段の生活にかえたのでしよう。子どもたちのいろいろの活動が出てきています。運動会がすむまでは大きな計画はありません」

磯部 「運動会が終わって運動会の絵をかくことについて、四日が運動会で七日に運動

会の絵をかきました。普段ですと、かく期間に何日間か余裕があるのでしようが、八日には遠足がありましたし、あと予定がつまっていたので、七日に絵をかかないと、あとかく日がないという状態でしたね。朝のうちは子どもたちはいつものようにそれぞれの活動をしていて、先生が画用紙等の準備をなきつて、ぼつ、ぼつと運動会の絵をかき始める子どもが出てきました。いちばん多いときはクラスの大部分の子どもがかいておりましたが、普段、子どもたちが絵をかいているときほど楽しんでいないようにみうけられました。もし子どもたちに運動会の絵をかきたい気持があるのなら、もつと、どんどんかきそうなものなのに、あまりかいていないですね。運動会が終わって運動会の絵をかく必要があるかどうかということ、運動会の絵の内容についてはどうですか」

堀合 「課題画(注11)を何度かやってみますが、やる子どもはやって、やらない子どもはち

っとも興味を示さないの、いいことではないとか、無理だということがわかれます。こちらの気持で課題画をしなればということでも出てきますが、やってみて後悔します。時間をかけて一日でも二日たつても、みんながよろこんで『ぼくやる。やる』といって子どもたちがすれば満足ですが、そうではなくて全然ふりむかない人がいます。子どもの興味はやっているときに楽しいのであって、また前の方が楽しみで、すんでしまったあと、どうこうというのはむずかしいですね。それは小学生になって教材としてかくときに、初めて意味があるのでしよう。

運動会という運動会の旗があつてというような、おとながおしえたような絵しかかかないですね。いもほりの絵にしてもかけないとはいわないけれども、いやな顔をして、白紙を前において、なかなかかかないですね。いろいろな経験をさせることのひとつのような気がして課題画をしますが、いろいろと考えさせら

れます」

磯部 「一学期に何人かの子どもたちが、高速道路の絵をかいたことがありましたね。^(注12)

長い間子どもたちがプロクキップや箱

積木やいすをつかって高速道路をつくる

遊びが^(注13)つづいていた頃、先生が巻紙を持

ってこられ、子どもたちが高速道路の絵

をかきました、子どもたちはとても楽

しそうにかいていました。あの場合、先

生は全員の子どものがかなかなくてはなら

ないというふうにお考えにならなくていい

わけですか」

堀合 「そうです。そして、表現されたものも

いいものができますね。子どもたちが遊

んでいるうちに『絵をかこう』といつて

かき始めますね。そういうときに運動会

の絵が出れば、それはいいですね。なに

磯部 「運動会の絵をかく、遠足の絵をかくと

いうことが大事なのではなくて、その中

にうちこんでかくということが大事なの

ですね」

注1、運動会に関する記録 第66巻第12号

56頁～・第67巻第1号58頁～・第67巻第

2号58頁～・第67巻第3号58頁～・第67

巻第5号

注2、隊列に関する記録 第67巻第2号60頁

～61頁・第67巻第3号63頁～64頁・第67

巻第5号

注3、運動会のリレー

注4、リレーに関する記録

自動車リレー 第65巻第1号56頁～59頁

3組に分れてするリレー 第65巻第4号

60頁～62頁

リレーがはじまるまで 第66巻第12号56

頁～57頁

聖火リレー 第66巻第12号59頁～60頁、

62頁・第67巻第1号58頁～61頁・第67巻

第3号66頁～68頁

運動会のリレー 第67巻第2号69頁・第

67巻第3号64頁～65頁

注5 音楽リズム・表現活動に関する記録

遊戯室での音楽リズム

種まき 第64巻第6号55頁～57頁

森の精 第65巻第7号64頁～66頁

遊びの中における音楽リズム

蜂 第65巻第1号59頁

バレエごっこ 第65巻第6号64頁～66

頁・第67巻第12号58頁

自動車運転の歌 第67巻第3号59頁

注6 運動会の遊戯

きゅうびいの遊戯 66巻第12号64頁～66

頁・67巻第1号63頁～64頁・67巻第2号

65頁・67巻第3号59頁

動物の行進 66巻第12号66頁～69頁・67

巻第1号64頁～65頁・67巻第1号71頁・

67巻第2号65頁

注7 運動会の歌の指導

きゅうびいの歌 第66巻第12号64頁

自動車運転の歌 第67巻第1号63頁～

第67巻第2号63頁～

注8 音楽行進 第67巻第2号60頁、64頁

注9 家のセット 第67巻第3号69頁～71頁

注10 運動会の絵 第67巻第5号

注11 課題画

雨ふりの絵 第65巻第4号62頁～64頁

注12 運動会の絵 第67巻第5号

注13 高速道路をつくる 第64巻第2号56頁

～58頁・第64巻第3号56頁

「だってさ、お母さんがお友だちをうち
によんできて遊びなさいっていったんだも
ん。ねー、ぼくんちにきなよ、ねー、お母
さんがそういったんだもん」

この子の母親は勤めに出ていて、夕方七
時ごろになるまで家にいない。団地の三階
に住んでいる、いわゆる鑢っ子である。近
所にめいわくがかかるといけないと思うの
で、友だちの家にあそびに行っではいけな
いといわれている。友だちをよんでくるの
はかまわない。けれども、近所の子どもの
母親は、だれもない三階のアパートに子
どもだけ出すのは心配である。この子にと
っては、母親がきめた約束は絶対の力をも
っている。

「幼稚園なんかつまんない。あたしが何
やろうと思つてるとお片づけになるんだも
ん。それにさ、ちょっとでも土を掘りかえ
すと叱られちゃうの。すべり台をさかさ
上がつてもいけないしさ、お砂場に水をい
れてもいけないんだよ。だから、あたし、

なんにもしないの」

幼稚園で何もしないでぶらぶらしている
子どもと、ゆっくりはなしたときの会話で
ある。幼稚園で先生のきめた約束は絶対で
ある。多くの子どもは、先生との間でトラ
ブルを起こしてまで、思いきって遊ぼうと
は思わない。むしろ、先生にいわれたこと
だけやって、他のことは何もしない方が安
全だと思ふ。

現代の幼児は、道を歩けば、自動車がか
ない。幼稚園にいけば、安全教育のため
に、集団教育のために、約束でしぼられて
いる。家に帰れば、遊び場がない。掘りか
えず土もない。いったい、どこで手足を伸
ばして遊ぶことができるのだろうか。

せめて、幼児の教育の場である幼稚園で
は、子どもの力を思いきり伸ばしてやるこ
とがとめでであろう。子どもの生活をしば
りつけている束縛から解放して、幼児の本
来の力が伸びる資を与えるところが幼稚園
である。

幼児の教育 第六十七巻第五号

五月号 ◎ 定価八〇円

昭和四十三年 四月二十五日印刷
昭和四十三年 五月 一日発行

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

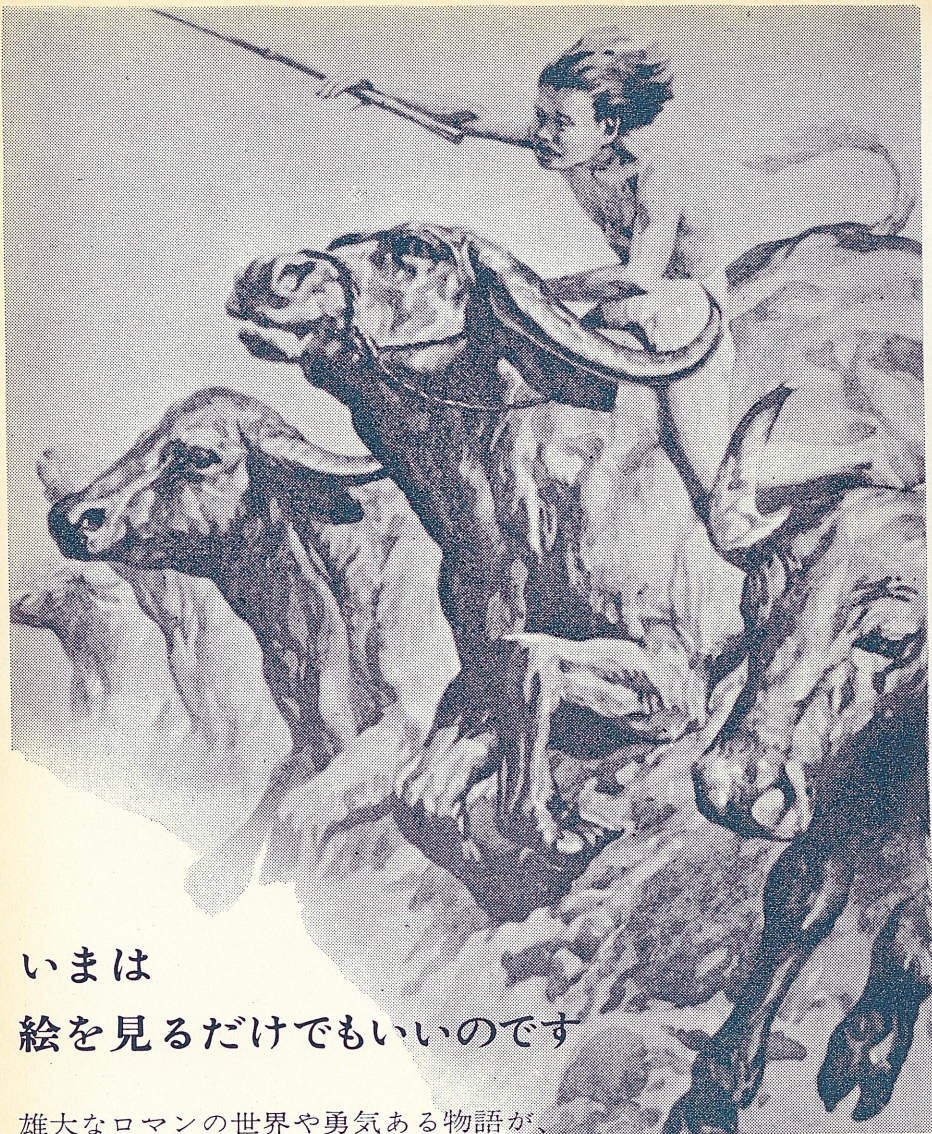
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売
所 フレーベル館にお願いいたします



いまは
絵を見るだけでもいいのです

雄大なロマンの世界や勇気ある物語が、
つよい感動の波となって、幼い心に伝わっていくでしょう。——

新刊！トツパンの絵物語

ジャングル・ブック こじき王子 火の鳥 トム・ソーヤーの冒険
以下続刊 ● 幼少年むき。園児におすすめぐださい。—— 定価・380円

■ 有名デパート・書店またはフレーベル館にてお求めください。 株式会社 **フレーベル館**



“もっとよんで……”

— 幼児の成長の糧となるお話絵本 —

キンダーおはなしえほん

L判多色刷36頁2大付録(キンダーずかん・工作) 定価 110円
団体購読価 100円

キンダーおはなしえほんは、子どもの豊かな情操を養うように…言葉を正しく使えるように…想像力を豊かにするように…とねがう絵本です。

幼児を
育てる
3つの
栄養!!



- 1 **キンダーブック**
キンダー
- 2 **おはなしえほん**
- 3 **ホームキンダー**

株式会社
フレール館